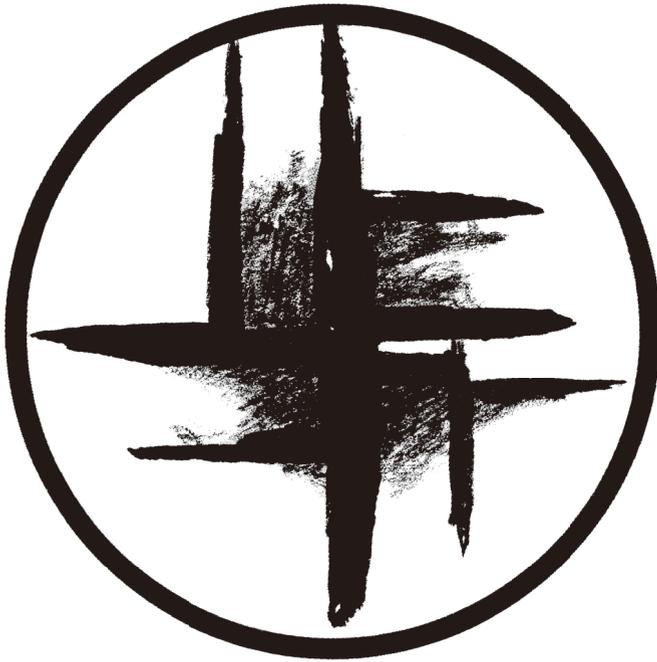


成瀬記念館

2011



N^o.26

日本女子大学成瀬記念館



荻 太郎「子供の日」2007 年 油彩・カンヴァス
第 71 回新制作展出品

附属豊明幼稚園の新園舎落成に際し、荻 太郎氏夫人より寄贈された晩年の代表作。

荻 太郎氏（1915－2009）は 1939 年、東京美術学校卒業。1951 年より 1983 年まで、本学住居学科で絵画デッサンを指導した。

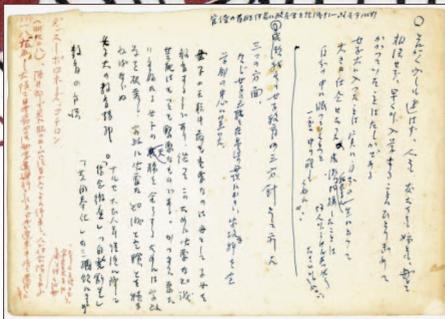
荻 太郎「鳩のレリーフ」



エントランス



園庭から見た新園舎



平塚らいてう手稿「…女子大に入ったことは実に自分の一生にとって大きな仕合せだった。成瀬校長その人と接したことは何人から受けた感化より大きいかもしれない。…」と書かれている



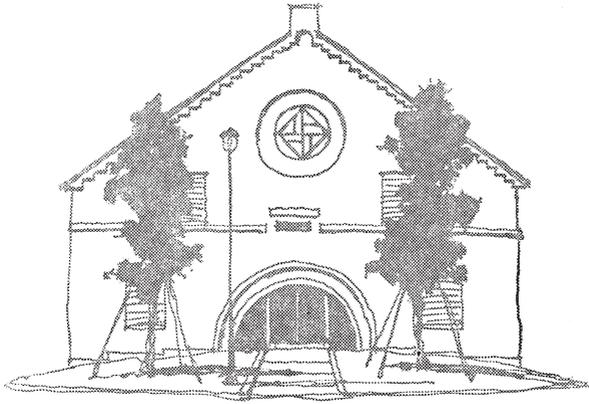
『青鞥』 創刊100周年記念展

『青鞥』と日本女子大学



2011年1月18日(火)～3月4日(金)

『青鞥』発起人5名のうち平塚らいてうをはじめ4名が本学の卒業生であり、発刊後にはさらに数多くの卒業生が携わった。創刊100周年を機に、『青鞥』を生み出した本学の土壌や執筆した卒業生、らいてうと成瀬仁蔵との関係に焦点を当て紹介した。本展を機に、新たにらいてうのご遺族より新資料「平塚らいてう手稿」が当館に寄贈された。



成瀬記念館 2011

No. 26

目次

口絵

附属豊明幼稚園新園舎落成

『青鞥』創刊一〇〇周年記念展 『青鞥』と日本女子大学

巻頭言

三綱領との出会い…………… 蟻川 芳子 4

随想

豊明幼稚園 落成式を前にして思うこと

——様々な思いを受け継いで新園舎へ—— 永田 陽子 6

企画展「江戸時代に生まれた庶民信仰の空間」 永村 眞 9

——音羽と雑司ヶ谷—— 永村 眞 9

研究ノート

——中寫邦先生の蔵書をいただいた—— 大門 泰子 11

建物紹介

宮澤トシの卒業証書…………… 山根 知子 14

資料探訪

傾斜地に寄り添い、子供の成長に寄り添う建築

——豊明幼稚園とさくらナースリーの改築に参画して—— 篠原 聡子 25

未発表資料

成瀬仁蔵の実践倫理講話——『実践倫理講話筆記』(明治三十七・三十八年度ノ部)を読む—— 片桐 芳雄 35

資料紹介

成瀬仁蔵インタビュー…………… 川端 康雄 48

成瀬記念館

展示の記録(二〇一〇年度)…………… 797372

成瀬記念館

展示の記録(二〇一〇年度)…………… 797372

表紙題字・成瀬の文字は創立者の自署 カット・江口まひろ

三綱領との出会い

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

蟻川芳子

創立者成瀬仁蔵先生は、亡くなる一ヶ月前、教育理念の集大成として「信念徹底」、「自発創生」、「共同奉仕」の三綱領を墨書された。私達は学生時代、「三つの教え」と呼んでいたが、この理念は本年創立一一〇周年を迎える現在も「女子を人として、婦人（女性）として、国民として教育する」という建学の精神とともに、学園を支えるバックボーンである。

近年文部科学省は、「個性輝く大学の確立」を奨励し、大学は独自の個性を発揮してその特徴を出すべきであることを強調している。私学であるからこそ個性があるわけで、それが建学の精神や教育理念に他ならない。

今年創立一一〇周年を迎えた本学は、さらに一〇年後の創立一二〇周年に向けて、昨年度より教育改革の検討に取り組んでいるが、その基本は創立者の掲げた建学の精神、教育理念の三綱領および自学自動主義の教育方針である。教育とは人材の育成であるが、その育成する学生像は、建学の精神に帰着する。現在の言葉で表せば、「自らの個性を発揮し、国際的視野をもつて問題解決ができる人材」ということなるう。また創立五〇周年を記念して出版された『成瀬先生のおしえ』によれば、三綱領は単に学園の教育理念であるのみならず、世に立つ人の生活理念であり、モットーである。これは成瀬先生の生活そのものの表現であり、この理念を継承し、実行することによって、はじめて先生の生命は永久に生き、本学園を指導することになる。これこそ先生が主力を傾倒して培養し来られ

た生命で、後継者に於て、一層鞏固に留意確立するよう切望せられた点である、と述べられている。
この本の編著者は、英文学部三回生、教育学部六回生で第五代学長の大橋廣先生と、成瀬先生が亡くなるまで先生に師事した国文学部五回生仁科節氏で、お二人とも創立間もない本学で、成瀬先生の教えを受けた方々である。

私がこの『成瀬先生のおしえ』に最初に出会ったのは、実は小学校六年生の時であった。どうしても私を日本女子大学で学ばせたい父母の意向で附属中学受験となったのであるが、母はある時この本を知り合いの方から手に入れてきた。私の面接のみならず、両親の面接のためにでもあるが、母は成瀬先生のおしえについて徹底的に勉強し、私に教えてくれた。中学の門をくぐる前に、三綱領は私の身に染みつく結果となった。入学式当日、まだ豊明講堂と呼ばれていた現成瀬記念講堂で、正面に掲げられた三綱領の額が厳かに輝いていたのを思い出す。祝辞を述べられた学長は、この本の著者大橋廣先生であった。

この四月初め、成瀬記念館で、この三綱領の現物を目にする機会に巡り合った。オフホワイトの絹布に力強く墨書された「信念徹底」は、一段と風格があり、今でも生命に満ち溢れているように見えた。私達は創立者の遺志を継承し、創立の地目白で、新生日本女子大学を目指し、その構想に専念して行く所存である。

二〇一一年五月

豊明幼稚園

落成式を前にして思うこと
—様々な思いを受け継いで—

新園舎へ—

永田 陽子

豊坂を上がってくると凛々しく堂々と、また懐深く、温かく迎えてくれる建物。新しい幼稚園が平成二三年一月に竣工いたしました。

現園舎への別れと思ひ

現園舎は大学創立七〇周年の記念事業として、一九七一（昭和四六）年に、当時の住居学科教授でいらした小川信子先生の設計で建築され、今年で四〇年になりました。小川先生は、子どもの鋭い感受性によって

教員も教えられ、その相互作用により子どもの社会性が養われるように工夫されました。また子ども同士の個性が見出せるように、出会いの場（渡り廊下のアルコーブ・テラスなど）を数多く設けられました。子ども達はこの隅々まで気を配られた環境の中で、主体的に環境にかかわり、一人一人が自分の遊びに集中し、皆と一緒に生活する楽しさを身につけております。それは創立者成瀬仁蔵先生の教育理念である自学自動の精神です。しかしこのような素晴らしい園舎も長い年月を経るうちに、水道管の破損による水漏れや電気関係のトラブルなど老朽化が進み、誠に残念ですが建て替えざるを得なくなりました。

かかわった方々をお呼びしたり、在園している子ども達や保護者の方々にも園庭を開放したりいたしました。園舎をご覧になられた皆さま方の中から、「大切な幼稚園を壊さないで下さい」「泰山木を切らないで!」「まだ、建て替えをしなくてもいいのに」などの声も沢山お聞きいたしました。その度に本当に皆様が豊明幼稚園を大切に思っただけで、いいことを改めて有り難く思いました。また一方でこの機会に皆様がい出を語り合い深めて頂いたことで、希望をもって新園舎の完成を楽しみにして下さったように感じました。

この建築中の一年半の間、園庭は前庭だけとなり、遊戯室はプレハブとなりました。今まで広い園庭で走り回っていた子ども達にとっては残念なのですが、幸い隣接する目白台運動公園も利用し、全教員で工夫し対策を講じながら、子ども達の育ち

に万全を期して参りました。子ども達は、二階のベランダから毎日出れ上がついていく園舎を眺めながら過しました。新園舎を使うことなく卒業していく学年が二学年ありました。昨年卒業した子ども達は、卒業前の創作劇『ずっと続くよ、ハッピー幼稚園』で、工事中にお庭で驚いていく虫達の様子や園舎が壊されていく寂しさを表しながらも、皆の気持ち一つになり、豊明幼稚園を大切に、新しい幼稚園を楽しみにしている気持ちを劇で表現しました。また、今年卒業の子ども達は創作劇『素敵な扉のワンダーランド』で、夏祭りの経験や工事の様子を取り入れ、「幼稚園は最高!」という言葉で締め括ってくれました。工事が一年半続いた学年でしたが、現園舎で、年長組として年中組や年少組の子ども達の先頭に立って夢中になって遊び込み、しっかりと最後を飾ってくれ

たことが、きっと新しい幼稚園にあっていいスタートをきる力となると思います。創作劇で一人一人が生きて生きと演じた姿に園生活が充実したものであったことを実感し、嬉しく思いました。これは一〇〇年以上受け継がれてきた伝統ある精神があるからこそであり、その中で子ども達がどんな環境であれ心身ともに大きく育っていくことを改めて確信いたしました。

新園舎とそこに託す希望

さて新しい園舎は、幼稚園創立一〇〇周年記念事業の取り組みとなり、住居学科の篠原聡子教授に基本設計をお願いいたしました。七、八年前から篠原先生・ゼミの学生さん・施設課の方々・教員達と、いろいろな園舎を見学し話し合いを重ね、ようやく建築の運びとなりました。篠原教授の設計のコンセプトは、①豊明

幼稚園の自由を尊重し遊び中心の保育が損なわれないようにすること、②園舎が南側に移るので、傾斜地を利用した四季折々の豊かな自然を享受できること、③子ども達にとつて最初の社会的空間の場なので、シンプルで親しみやすく、今自分ごとここにいるのがすぐ分かるような構造にすること等々、です。

玄関の中央の柱には現園舎の遊戯室の床板を、二階ホールの腰壁には前園舎の遊戯室の床板を張ります。

また、現園舎のために荻太郎先生が制作されたモニュメント、太陽・鳥・木・トンボなども大切に新園舎に取り付けました。そして荻先生の奥様のご厚意により、晩年の代表作『子供の日』の油絵も寄贈していただき、階段の踊り場一面を飾ってくれます。

四月からは新園舎での生活が始まり、現園舎は夏休みに取り壊すこと



新園舎に移された荻太郎作太陽のレリーフ

になります。一学期は新園舎での生活をしながら今までの園舎を見て過ごします。一人一人の子ども達がそれぞれの思い出を紡ぎながら、少しずつ納得しながら新園舎に馴染んでいく時間であると思っています。

最後になりましたが、園舎が建て替えられるということで、多くの方々が様々な思いを伝えて下さった

ことに感謝しております。残念という気持ちなども含めていろいろなお気持ち大切にし、新しい園舎での保育に活かして参りたいと思います。豊明幼稚園の子ども達が未来に向けて益々活躍出来る力を育てていきますように、教員一同力を合わせて参ります。本当に有り難うございました。

(豊明幼稚園園長

ながた ようこ)

企画展

「江戸時代に生まれた

庶民信仰の空間

―音羽と雑司ヶ谷―

永村 眞

平成二三年の九月二四日（金）から一〇月五日（火）までの一二日間、文京区と日本女子大学の共催による企画展「江戸時代に生まれた庶民信仰の空間―音羽と雑司ヶ谷―」が、文京シビック・ギャラリーと雑司ヶ谷鬼子母神の二カ所を会場として開催されました。この企画展は、文京区と女子大との学術交流協定に基づいて、平成一八年度より今年度まで開講されている、「文の京地域文化インタープリター養成講座」を受講

した区民によって企画・運営されたもので、本学史学科の院生・学生の皆さんも協力しました。

この「文の京地域文化インタープリター」（以下、IP）ですが、文京区の歴史や文化を深く理解し、地域と世代をこえてその知見を広め伝えるという役割をはたすため、文京区が養成・認定したボランティア集団です。本学にはその養成講座が置かれ、初級から中級・上級講座が配置され、さらに演習講座が併設されています。初級は本学L1Cで、中級・演習講座は文学部史学科、上級講座は大学院文学研究科史学専攻で、寄附授業として開講されており、すでに七〇名の区民が初級を終え、中級・上級に至る講座を受講しています。平成一九年度の「護国寺展」に続いて開催された本企画展は、IPによる学習と研究の成果を発表する場でもありました。



文京シビック・ギャラリーの展示会場

さて江戸時代の中期より江戸域から西北部（文京・豊島区域）には独特の信仰空間が生まれ、江戸の庶民にとって信心の拠りどころとなっていました。鬼子母神堂・法明寺と護国寺、その門前町を包みこむ信仰空間は、地域に住み集う人々の個人的な信仰・習俗を形づくりました。広く知られる「雑司ヶ谷鬼子母神のお

会式」は、今日に受け継がれる地域文化の一つのかたちです。そして護国寺と鬼子母神堂の門前町として発展をとげた音羽と雑司ヶ谷は、江戸の庶民にとって、信心をもって訪れる場であり、またさまざまな遊興の場でもありました。

今は文京区から豊島区にわたるこの地域の歴史を、この企画展では、江戸の庶民信仰という視点から、以下のような柱を立てて俯瞰しました。

(1) 江戸町の形成（江戸の都市が形成される過程をたどりま

す）。

(2) 護国寺と音羽（護国寺が創建され將軍綱吉と桂昌院の御成があり、その門前町として音羽が生まれました）。

(3) 護国寺から鬼子母神へ（江戸の庶民の参詣路と周辺の景観を復元しました）。

(4) 鬼子母神と雑司ヶ谷（戦国時

代、清土（文京区）に出土した鬼子母神像を安置する雑司ヶ谷の鬼子母神堂が創建され、庶民信仰の中心となりました）。

(5) 法明寺と法華宗（法華宗（日蓮宗）が発展するなかで、祖師日蓮の思いをうけつぐ不受不施思想と鬼子母神信仰の実像を理解します）。

(6) 鬼子母神堂と境内・門前（鬼子母神へ寄せられた幅広い人々の信心、境内・門前を訪れる江戸の人々の姿を見ま

す）。

(7) 御会式（「お会式」の本来的な役割とその変遷を跡づけました）。

一般の博物館・美術館などで開催される展示とは異なり、今回の企画展はシビック・ギャラリーと鬼子母神堂という二カ所を会場としました。



雑司ヶ谷鬼子母神堂内の展示と解説

シビック・ギャラリーでは多彩な史料・資料のパネル展示と、映像・音声により展示の意図を理解していただき、鬼子母神堂では時代をへた建物のなかで、絵馬や文書の原本を通して庶民信仰を実感する、これが二会場を設けた意図です。また二会場での展示だけではなく、護国寺から鬼子母神堂・法明寺に至る道筋を歩

きながら、今はその姿を消したと思いがちな江戸の景観を、身近な風景のなかによりがえらせる、そのために町案内を催しました。そして展示を企画したIPが、会場で展示を解説し、町案内では道々に見られる江戸の残像を語りました。

この企画展では図録『江戸時代に生まれた庶民信仰の空間―音羽と雑司ヶ谷―』とともに、外国人への英文パンフレット“‘The Religious Faith of Japan in the Edo Era’”を作成し、さらに鬼子母神堂では建築的な特徴を解説した解説パンフレットを配布しました。この一二日にわたる手作りの企画展に、約五千人の方々がおいで下さったことは、企画・運営をになったIPの諸氏にとって大きな励みであり、今後の活動を発展させる大きな足がかりとなることでしょう。

最後に、今回の企画展をご後援下

さった、法明寺近江正典住職と鬼子母神堂の皆様、豊島区と区立郷土資料館の関係者の皆様に、心よりお礼申し上げます。

(日本女子大学文学部史学科教授

ながむら まこと)

もっと書架があつたらいいの……

—中^{なか}寫^{しや}邦^{くに}先生の蔵書を

— いただいで—

大門 泰子

昨年、名誉教授で成瀬記念館の初代主事をつとめられた中寫邦先生から蔵書の一部を大学にいただいた。というより、まだまだ研究の真つ最中にある先生に、図書配架の都合上、急いで寄贈をしていただいたという方が事実に近い。厩大な蔵書は、いうまでもなく先生の研究の軌跡そのもの。その作業に立ち会わせていただけただけことは、幸運で、この上なく貴重な経験であった。

中寫先生といえは成瀬仁蔵研究、

女子教育研究者として誰もが知るところであるが、その研究は史学科に着任された当初から、先ずはご自身の足場をしっかりと見つけておきたいという気持ちで始められたそう。そして現在、二冊目の成瀬研究をまとめるべく準備をされている。一方、日本近代における女性の労働（職業）・生活・戦争をテーマに研究を重ねられ、女性史研究も引っ張ってこられた。

歴史学研究の中では、女性の視点からの分析や日常の暮らしを史料とするような研究は後発で、一九七〇年代後半から八〇年代にかけて広く関心が寄せられるようになった。ついでに記すならば、各地の社会教育講座で女性問題が取り上げられ、自治体女性史が編纂され始めたのもその頃で、国立女性教育会館（一九七七年開館）も資料収集に積極的となった。先生はそうした社会活動にも

多く関わられ、学生たちには「高校で学習した日本史の教科書に何人の女性の名前が載っていたでしょうか」と問いかけて、シヨックを与えた。私も目から鱗の落ちた一人で、絶対を信じて勉強してきた教科書を薄っぺらな本のようにも感じてしまった。

一昨年の秋、初めて荻窪の先生のお宅にお邪魔し、案内された書齋をみてびっくり。ある程度は予想していたものの、こちらで準備している書架の容量をはるかに超えている。さらに、女性史、地域女性史、教育史、学校史、日本近代史関連の図書や事典、そして文庫や新書の数々と、そのジャンルの幅は広く、ただだ本をどのように選定したらよいか、たちまち途方にくれた。いただきだと申し上げておきながら、誠に勝手な話だ。しかし、本の背表紙をみているのは楽しく、先生の研究テ-

マの関係性が見えてくる。働くことは生活の上に成り立ち、労働や生活は教育の上に豊かになるという大きな連鎖の関係がそこにあった。

蔵書の中で、研究書と並んで積まれている雑誌の数々に興味を湧か。明治後期の『家庭週報』や戦時中に発行された『主婦の友』などは、史料というよりも褐色に変わった冊子そのものにロマンを感じる。どんと場所をしめる復刻版のシリーズは圧巻。全七〇巻にもなる『婦女新聞』（不二出版）のほか、先生が関わられた婦人雑誌や『近代婦人問題名著選集』（全三〇巻 日本図書センター）などが二〇種余りある。これらは、当時の女性がおかれていた社会的地位や活動、生活、意識などを知る上でとても貴重な史料といえる。国立国会図書館のウェブページに「女性問題を調べるための参考図書」として紹介されている『近代婦人雑誌

目次総覧』(大空社)に明らかのように、明治・大正の女性雑誌は、短命なものが多かったが、その中で『婦女新聞』『女鑑』(全七一巻 大空社)などは長期に渡って発行を続け、抑圧下にある女性たちに様々な学びや生き方、苦しみを示し、未知の世界を啓蒙していた。成瀬仁蔵が執筆した記事をはじめ、日本女子大学校関係の記事も多く、学園史を探求する上にも欠かせない史料だ。『婦人衛生雑誌』(全三六巻 大空社)には欧米から入って広がった衛生思想が国家政策と密接に関連しながら展開している歴史が描かれ、『性教育研究の基礎文献集』(Ⅰ期・Ⅱ期一九巻 大空社)と併せて、女性の性だけを蹂躪する男女の関係を読むことができる。ほかにも、多様な女性像をつかめるように編集された大空社の近代女性文献資料叢書『女と戦争』(全二四巻)『女と職業』(全二

四巻)『女と生活』(全二〇巻)などがあり、どれもこれも一つの所に並べられたらなあという気持ちは募った。

私としては、できるならば、先生が収集された本のつながりを絶つことはしたくなかった。しかし物理的な問題だけは避けられず、結局、先生に相談申し上げ、成瀬仁蔵研究関係の史料と教育史、女性史関係の蔵書だけにしほっていただけことにした。第一段階の作業で蔵書の一部は、すでに大学に運ばれ、成瀬記念館と現代女性キャリア研究所の書架に配架された。今後、さらに先生や図書館とも相談しながら第二段階へと進め、いずれ、一つのリストにまとめる予定である。それが、先生の大事にされてきた蔵書への礼儀であると同時に、何よりもそれらが有意義に活用されることを願うからである。



復刻版シリーズの一部

(史学科一九八五年卒業
おおかど やすこ)

文中*は中島先生の関係された図書
国立国会図書館ウェブページ

[http://navi.ndl.go.jp/research_guide/entry/
theme-honbun-102373.php](http://navi.ndl.go.jp/research_guide/entry/theme-honbun-102373.php) (2011/6/9)

研究ノート

宮澤トシの卒業証書

1 トシの卒業証書の背景

宮澤トシは、日本女子大学家政学部第一六回生として一九一九（大正八）年三月に卒業した。トシは、最終学年の一九一八年二月二〇日入院し、翌二月下旬に退院したのち、三月三日に花巻に帰ったことで、三学期を欠席したため、見込み点による卒業となつた。したがって、トシは入院中には一月二九日の成瀬仁蔵校長の告別講演には出席できず、また退院して帰花した翌日三月四日に成瀬校長が永眠したことや、九日の告別式についても、情報のみ得て、残念に感じていただろうことが推測される。そうしたなか、卒業証書は、三月末頃、トシが入寮していた「責善寮」の「寮監兼指導者」であつた

山根 知子

西洞民野が、花巻まで届けたと伝えられている（『新校本宮澤賢治全集』第一六卷（下）筑摩書房 一九二二頁）。その後、トシの卒業証書は、トシが大正一一年一月二七日に二四歳の若さで逝去した後も、生家宮澤家にて保管されていた。

宮澤家は、一九四五（昭和二〇）年八月一〇日の花巻空襲で家屋が焼失したが、賢治の作品原稿等については、弟宮澤清六氏によつて防空壕に持ち出されたものと、土蔵内で一部焼け残ったものが、焼失を免れた。一方、トシの遺品については、すでに公表されている書簡（堀尾青史編「宮澤トシ書簡集」『ユリイカ』一九七〇年七月青土社 以下書簡の引用はここからとする）があり、そ

れらもこうした状況のなかで守られたと考えられることから、トシの卒業証書も同様の経緯によるものと推察される。

トシの卒業証書の現存については、これまで確認されていなかったが、二〇一〇年一月八日、花巻市内の宮澤家に伺った際に、故清六氏の長女宮澤潤子氏によって同家での所蔵が確認されたことを知らせていただき、拝見することができた。このたび宮澤潤子氏のご快諾をいただき本誌にて発表の運びとなった。

2 トシの卒業証書翻刻

宮澤トシ

本校實學科家政学部ニ在學シ左ノ科目ヲ
學習シ正ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

必修科目

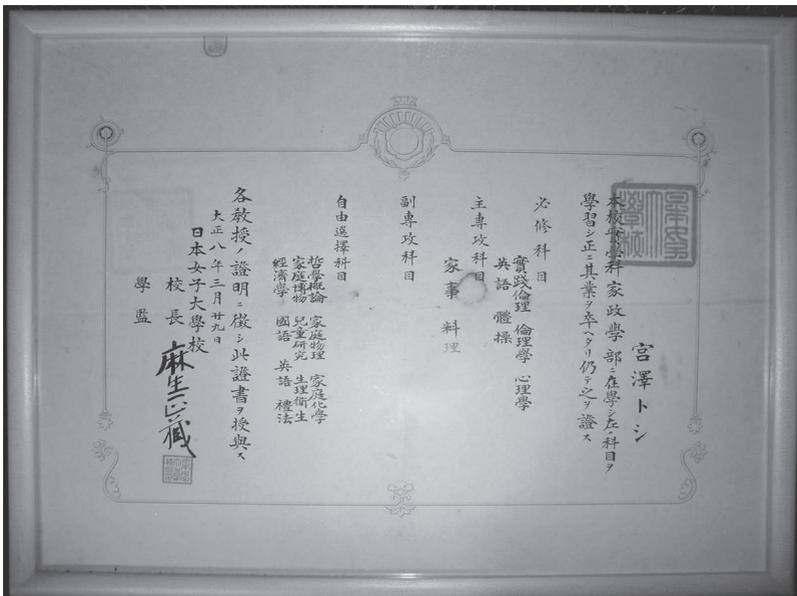
實踐倫理 倫理學 心理學

英語 體操

主専攻科目

家事 料理

副専攻科目



自由選擇科目

哲學概論 家庭物理 家庭化學
家庭博物 兒童研究 生理衛生
經濟學 國語 英語 禮法
各教授ノ證明ニ徴シ此證書ヲ授與ス

大正八年三月廿九日

日本女子大學校

校長 麻生正藏

學監

3 卒業証書記載内容についての解題

宮澤トシは、一九一五（大正四）年三月、県立花巻高等女学校を卒業した。同女学校が四年制であったため、日本女子大学校では、まず大正四年度は予科に在籍し、大正五年度から大正七年度までの三年間を本科にて過ごした。卒業証書では、この本科三年間に履修し、認定された科目が記載されている。

また、この大正六年四月の学則改正では、新学制と科目選択制度の採用が行われた。また、この新学則では、授業時間の減少と修業年限の伸縮が特徴となる。ここで、予科が廃止されたことから、トシにとっても、在籍した



宮澤トシ（卒業写真）

四年間を通して、一年生から四年生と呼ぶ認識に変わる。

こうしてトシは、在籍した前半の二年にあたる大正四年度と五年度では、旧学制による履修をし、後半の二年にあたる大正六年度と七年度では、新学制による履修をしている。この改正以前の旧学制時代にも、「自由選択科目」の制度はあったが、新学制においては、その科目数の範囲が広がった。また、卒業証書に記載のある「副専攻科目」とは、「大正六年改訂新学則抄」（『日本女子大学校四拾年史』昭和一七年四月二〇日日本女子大学校 一八二頁）によると「第十三條 副専攻科目は必修科目及び主専攻科目学習の外に尚余力ある場合に、学監の許可を得て各学生の要求に応じて選択専修し得べき聯絡ある一団の科目にして、主として第二第三第四学年に於て研究するを通則とす」とされるものである。しかし、トシの卒業証書では「副専攻科目」の欄に記載がなく、修業認定簿にも、大正六年度の「副専攻

科目」の欄には「英語」と「裁縫」の科目名が書かれているが点数の記載はない。これは後述する書簡「六」「七」にあるように、トシは体力面の考慮から、「余力ある場合」に可能とされた「副専攻科目」の履修をしなかったものと考えられる。

なお、証書書面の「學監」の氏名が記入されていない点については、トシの卒業年度である大正七年度において「學監」（「大学校職制・維持方法」によると「第三条學監ハ校長ヲ補佐シテ一般ノ校務ヲ掌握シ校長不在ノ時ハ之ガ代理ヲナス」とされる）は、麻生正蔵であったが、成瀬仁蔵校長の三月四日の逝去に際し、學監の麻生正蔵が、急遽第二代校長となったことから、卒業証書記入時である三月末には學監は不在であったと考えられる。

4 修業認定簿との科目の照合と担当教員

トシの修業認定簿は、青木生子氏によって著書『近代史を拓いた女性たち』（一九九〇年六月 講談社 二〇六～二〇八頁）に公表されている。ただし、認定された科目は、トシが在籍した四年間のうち、最初の三年間（予科、本科一年、本科二年）のみであり、最終学年では三学期の病氣入院のため、修業認定簿に成績は跡づけられていない。

その卒業証書に記入された認定科目について、まず修業認定簿と照合することで履修した年度を確認し、次に各科目の担当教員名を、卒業証書の記載順に、後掲の一覧に示した。この担当教員名については、現存する資料のうち授業担当者の実態を最も正確に示していると思われる成瀬記念館所蔵の未公開資料「明治三十四年度以降毎年十一月調査報告綴込」の「私立日本女子大学校職員調」（大正四年度～七年度）（以下「職員調」とする）によって確定した。その際、この「職員調」にはない教員名が、各年度の「日本女子大学校規則」（以下「規則」とする）に記載している場合がしばしばあり、これらについては「職員調」が該当年度中（一〇月）の役所への届けであるのに対して、「規則」が前年度の印刷による学生への案内であるため、「規則」が実態と異なってくることは否めないが、トシが担当の可能性のあった教員として認識していたであろうことを考慮して、「規則」のみに登場する教員名を（ ）内に示した。なお、科目名については、例えば「倫理学」と「倫理」、「心理学」と「心理」など、「学」の文字の有無のみの違いが見られる場合は、同一科目として扱った。一方、さらに科目名の異同がある場合も、大正六年度の新学制による変革等に伴って名称変更された可能性も考えられるため、情報を

注記したうえ、類似の科目名を同一の科目として扱った。

なお、卒業証書にはあるが修業認定簿にない科目として、「哲学概論」「家庭物理」「児童研究」の三科目があった。これらは最終学年の大正七年度に履修していたが、病氣入院のため見込み点による認定が行われた科目であると推測し、「大正七年度推定」とした。

さらに、「実践倫理」については、トシの修業認定簿の大正五年度と大正六年度（必須科目欄）とに科目名の記載はあるが、成績の記入は行われていない。この科目は、当時点数化されていなかったものと思われるが、現存する「実践倫理講話筆記」によると、毎年、予科から本科のどの学年も対象になっていることから、左記のように判断した。

《卒業証書に記載された科目（本科一年～三年 大正五年度～七年度）》

必修科目

実践倫理（大正五～七年度） 成瀬仁蔵

倫理学（大正六年度） 麻生正蔵

心理学（大正五年度） 麻生正蔵、松本亦太郎

（福来友吉）

英語（大正五年度）

島田重祐、岸本能武太

小池實恵、小山志ゆん、

ヘレン・ボイド、

イージー・フィリップス

（ミス・アズバン、

ミス・ウオーズウォルス）

体操（大正六年度）

白井規矩郎、木内愛

主専攻科目

家事（大正五・六年度）

井上秀

料理（大正六年度）

手塚かね、渡邊鎌吉、

赤堀さく

自由選択科目

哲学概論（大正七年度推定） 麻生正蔵

家庭物理【規則】では科目名「物理、化学】

（大正七年度推定） 近藤耕蔵、後藤牧太

家庭化学【修業認定簿では科目名「応化」（応用化学）の略】

（大正五年度） 長井長義、鈴木ヒデル

家庭博物【修業認定簿では科目名「応用博物」、「規則】では科目名「博物】

則】では科目名「博物】

(大正五年度)

大橋廣、山内繁雄

(渡瀬庄三郎)

児童研究 (大正七年度推定) 記載なし(高島平三郎)
生理衛生【規則】では科目名「衛生学」「生理学」、
修業認定簿では「主専攻科目」に位置づけ【

(大正六年度)

大澤謙一、
横手千代之助、三宅秀

経済学

(大正五年度)

中隈敬藏

国語

(大正五年度)

弘田由巳

英語

(大正六年度)

島田重祐、岸本能武太、
小池實恵、小山志ゆん、
松浦政泰、

イー・ジー・ウィリップス、

デー・エム・チョープ

(ミス・ボイド、

ミス・アズバン、

ミス・ウオーズウォールス)

礼法

(大正六年度)

村田志賀

以下の二科目がある。

裁縫

(大正五年度)

大飼すみ

法制

(大正六年度)

中村進午

これらの二科目が卒業証書に未記載となつてゐる理由は不明である。

また、修業認定簿には、大正六年度のみ「必修科目」

「主専攻科目」「副専攻科目」「自由選択科目」の区分が明記されているが、この区分の照合をすると、卒業証書と不一致となるのは「生理衛生」であり、修業認定簿では「主専攻科目」に入つてゐる。

5 トシの学びの姿勢―書簡その他の資料から

次に、トシの書簡その他の資料による履修状況および担当教員に関する記述から、さらにわかるトシの学びの様子について補いたい。

まず、トシが家政学部予科に入学してすぐの四月と五月に、真宗大谷派の先進的な僧で若者に大きな影響力のあつた近角常観にあてて出された二通の書簡がある(岩田文昭・碧海寿広「宮沢賢治と近角常観」『大阪教育大【学紀要】二〇一〇年九月】。四月の一通目でトシは、近角に手のつけようのない空虚な心を打ち明け「何とかして早くこの状態を脱し、積極的な充実せる生活をなし

以上のように、卒業証書に記載された科目名に符合するようであてはめて列挙したが、修業認定簿には成績の記載があるにもかかわらず、卒業証書には記されていない

たきものとは、今この疲れし心に残れる只一つの望み願ひに御座候」と救いを求める思いを吐露する。これは、入学前の一九一五（大正四）年四月の花巻高等女学校卒業間際に、トシが音楽教師への恋愛について地元紙に醜聞として記載され、他者からの誹謗の矢を受けた挫折体験の直後であったことによるといえる。

その後何度か近角の講話に通つて話も交わしたようだが、五月の二通目には、今も光が見えないと述べ「当校の主義は自動自発、研究的、人格の向上、修養、目的ある生活、など、云ふ言葉を厭になりません程聞かされます。当校の先生方を見ますと、『犠牲の精神』とか『愛』とか云ふものに生きて、死の問題をも解決されてる様に見える先生もあるように見受けられます。／＼一層の事この学校を批判的に見ず、自分もその中に同化してしまはふか、など、も思ひました。然し、同化する迄の努力がいやなので御座いますから、何とも仕様のない次第で御座います」という心境を告げている。さらに末尾では今後近角の講話を聞いても、至らない自分では力を得られないとすれば「向上とか何とか仰る先生に依つて、当たつて見ようかとも思ひます」と、成瀬校長の主義に従う可能性を見せている。

次に授業での様子がわかるのは、トシが卒業後に書いた

「自省録」（拙著『宮沢賢治 妹トシの拓いた道』二〇〇三年九月 朝文社 三四〇頁）における次のような回想による。

忘れもしない二年生の秋、実践倫理の宿題に「信仰とは何ぞや教育とは何ぞや」と出た時私は魂を籠めて可成り長い論文を書いた。

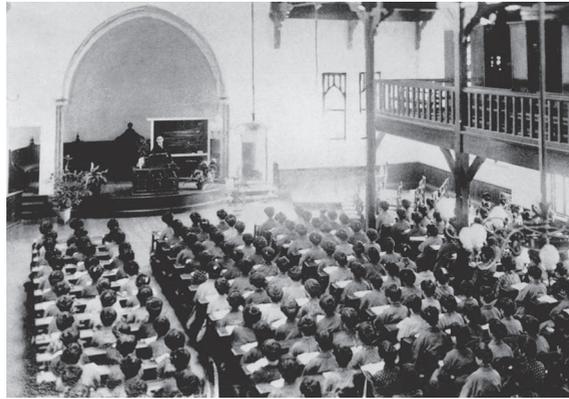
これは、『実践倫理講話筆記』でも、大正五年九月二七日に、本科一年（トシはここでは「二年生」と称している）と予科を対象として出された課題であることが確認できる。

このうち最終学年に飛ぶが、大正七年六月二日付の父あて書簡〔六〕では、体調を崩したトシが家族の心配を考慮し、養生し快復しつつある状況を伝える文章のなかで、次のように述べている。

体操の先生もいろいろ呼吸の方法や冷水摩擦の仕方などを皆に教へて下さいましたので其の仰せに随ひ当分無理な体操ハせずに極く静かに散歩などを（校内で）し追々強めて行く事にいたしました

この体操の先生とは、白井規矩郎か木内愛であると思われる。

また、大正七年六月八日付の父あて書簡〔七〕に次のようにみられる。



成瀬仁蔵の実践倫理講話

ハ五時間の家事、三時間の料理も入り居り候

この授業時間数の報告では、前年の新学則による、自己の体力学力に応じて自学自習の余力を生じさせる目的から以前より減少した授業数の設定を伝えて、その範囲の最小の時間数を採用していることで、心配をさせないよう配慮している様子がわかる。

先づ授業時間数ハ、一週十九時間以上廿五時間までの間に好きなかげ選ぶ事に成り居り候が私はその最小の時間の十九時間を選び居り候 その為忙しき事ハ少しもなく遊び半分の様に呑気な学課に御座候 その中に

大正七年一〇月二六日付書簡（一四）では、ハンセン病患者の施設である「目黒の慰廃院」に行ったことが書かれている。これは、「第二回社会事業実地研究」にて生江孝之教授とともに有志で二〇日、日曜日に訪れたものであったという（慰廃院の半日）（篤子）『家庭週報』第四八九号 一九一八年一〇月二五日）。トシの履修状況では、生江孝之教授の開講する科目「社会事業」という授業としての履修はしていないようだが、こうして有志グループへの参加をすることもあったということがわかる。

また、同書簡（一四）では「おしげさんに何か本をと思ひ候へどこれぞと思ふものもなく阿部次郎論集を一緒にお送りいたし候」と書き、『阿部次郎論集』（大正四年五月刊）を送る。阿部次郎が日本女子大学の講義を持つようになった時期は、思索の書『三太郎の日記』（大正三年四月 東雲堂）、『三太郎の日記 第二』（大正四年二月 岩波書店）によつて脚光を浴び、その流れのなかで講義担当者として声が掛けられたというタイミングであった。この日本女子大学校における講義については、「規則」と阿部の日記（『阿部次郎全集』）によつて調べたところ、阿部が大正六年度より日本女子大学校での講義を担当し始めていることがわかる。つまり、トシの

在籍三年目の大正六年五月より大正一二年二月まで、日本女子大学校での講義が行なわれている。

その着任の経緯は、阿部の日記(『阿部次郎全集』第一四卷 昭和三七年一月 角川書店)では、正確には大正六年五月二十五日より講義を始めていることがわかる。阿部の担当分野は、「規則」(大正七年五月印刷)によれば「国文学」とされて始まっている。また、先の日記によると、阿部の出講は、大正六年度では一週二時間で、担当科目名は「文学原理論」であり、大正七年度の「九月から美学二時間」(六月二十八日)が増え、午前「美学」、午後「文学原理論」となることで、二科目担当となる。

この二年度分がトシ在籍中に学内で行なわれた阿部次郎の講義であるが、トシの一年下の網野菊(一七回生 英文学部)が、学内での阿部の姿を「私の在校時代あんなに学生の人気の焦点となつた先生を他に知らない」と書き記し、トシと重なる時期では、大正六年度と七年度の「文学原理論」について触れている。この授業は文学部の授業科目であつたために、家政学部所属のトシについては、これらの阿部次郎による文学部の授業科目を正式に履修することができなかったが、網野菊の記述にさらに「文科だけでなしに家政科の人までが盗聴に行つた」とあることから、トシが「盗聴」という形で阿部の

授業を受けた可能性は十分に考えられる。そうした学内での授業体験から、トシは妹に『阿部次郎論集』を送つたと思われる。

さらに、大正七年一月二四日付けの兄賢治にあてた書簡(一七)にて、卒業論文と思われる内容変更の相談に関して、トシの本来進めたかつた内容が記されている。論文の事も御心配下され有がたく存じ申し候

余り意気地なき事に候へど其後あの論題はとても短い間に力及ばぬ事とあきらめて今度ハ全く方向を變へる事にいたし候 いづれ食物の事住宅のこと衣服の事ハ卒業後も永く心がけてしらす少しにても改め度くと望み居り候

今度の題ハ未だ確実にはきまり申さず候へどにかこれから何もない頭にて作り出すにて候へばなか／＼に頼りない事に御座候

ここには、「食物」「住宅」「衣服」という主専攻科目に関わる幅広いテーマ設定がなされていたことが見受けられる。

また、この同書簡にて、トシは成瀬仁蔵への尊敬の思いを兄賢治にあてて次のように記している。

大正十年位までハゆる／＼と御考へを練らるゝ事に賛成申し上げ候 とにもかくにも真生活の方法と職

業との一致の外に望まじき生活法ハ考へられず候一人／＼も一家もその天職を見出して之を遂げたくと折角ねがひ居り候 現在の様な怠け者にてハ随分心細く候へどもこの望み空なるものとハ思はれず候現に多くの困難や貧乏や病氣や孤独などを忍はれて四十年一日の如く教育に我を忘れらる、校長先生が生きたる証明と敬はれ申し候 ともかく私もこれから怠らず成るべく早く然し焦らずにこれを見出し度く存じ候

このようなトシの成瀬校長を慕う気持ちだが、入学当初の迷い多き時期から、「実践倫理」の授業を通して高まり、最終学年でこのような思いにまで至った経過がわかる。

6 トシの学びと卒業後

トシは、卒業後約一年の病氣療養を必要としたが、その後一九二〇（大正九）年三月一六日には、同級生であった加用とき子にあてて、書簡「二二」にて次のように書いている。

晩香寮に手塚先生の御あと又平野先生の御あととして又は小さい方々の御姉様としてどの様な御生活を御経験遊ばされていらっしやいますか御伺ひ申した

うございませう。

御別れらしい御別れも致さずに終わってしまひましたのでからだか恢復致し次第上京致したいと存じて居りましたがやつと近いうちに上京も叶ひさうになつて参りました

加用とき子は、卒業後も晩香寮に残り、「料理」担当の手塚かね教授の助手を務め、寮監を兼ねた平野浜教授のもとで寮での一助も担っていたと考えられる。この友人への文面から、トシが卒業時の無念さを胸に抱えていたことがわかる。ただし、この上京がどのように実現したかは、不明である。

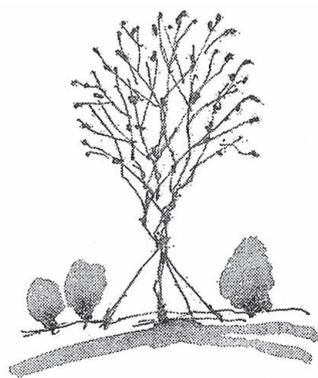
こうしてトシは、病氣回復後の大正九年九月二四日付で、母校花巻高等女学校の教諭心得となるが、翌大正一〇年九月一二日付けで、病氣再発のため退職する。その約一年間の教師時代に担当した教科は、家事と英語であった。特に日本女子大学校で、主専攻科目としていた「家事」については、自らの専門であるという意識をもっていたと思われる。

また、在職中の大正一〇年四月には、花巻高等女学校より依頼され、日本女子大学校に教師の斡旋を頼むための上京をしているように、大学および主専攻科目担当者井上秀教授、手塚かね教授をはじめとする教員とのつな

がりをもち続けていたことが推察される。

以上のように、今回の宮澤トシの卒業証書によって認定された科目が明らかになり、そこからの考察によって授業科目とその年度および担当教員の提示が可能となった。こうしてトシが日本女子大学校で学んだ実態が具体的にになり、さらに不明な点を明らかにしながら考察を進めていくことは、今後トシ自身の個々の学びからくる思想や兄賢治との関係の考察を深めるうえで、意義深いことであるといえよう。

（一九八九年大学院文学研究科日本文学専攻博士課程
前期修了 一九九二年同博士課程後期満期退学 ノート
ルダム清心女子大学教授 やまね ともこ）



建物紹介

傾斜地に寄り添い、子供の成長に寄り添う建築

—豊明幼稚園とさくらナースリーの改築に参画して—

篠原 聡子

豊明幼稚園は、一貫教育を標榜する日本女子大学にとって、その教育の始点となる場所である。住居学科にも毎年何名か、豊明幼稚園出身の学生が入学してくるが、みな昨日のことのように幼稚園での体験を語る。それくらい、豊明幼稚園での体験が彼女たちの精神構造、あるいは知的な構造の一部となっているのかと思うと、その重要性を痛感する。

私は、設計の仕事をする中で、いくつかの公立の幼稚園の設計をしてきたが、豊明幼稚園の前園舎を設計された小川信子名誉教授（家政学部住居学科）のように、子供の施設のエキスパートではないので、豊明幼稚園の改築という重要なプロジェクトに参画するにあたり、幼稚

園の先生方の教育理念をできるだけ率直に建築に反映させるべく、設計者としてお手伝いをさせていただいた。

正確には思い出せないくらい、たくさん幼稚園を豊明幼稚園の先生方と見て回り、その都度先生方は、取り入れるべき点や問題点を整理され、毎回そのレジュメをいただいた。そうした見学や勉強会を通して、豊明幼稚園の教育思想が、部外者の私にも皮膚感覚として伝わってくるように思えた。設計者としては、幸運なことであったと思う。

実際の基本計画にはいると、住居学専攻の大学院生たちが加わり、今まで出された要望を整理しながら、様々なスタディをすることになった。先生方は、前園舎が大

変に気に入っており、このまま移動させてほしいとまで言われた。しかし、残念ながら、今回の計画敷地には、大きな高低差があり、それはかなわないことであった。

それでも、一時期は、前園舎のように園舎を敷地の北側に配して、園庭を南側にとることをスタディしたが、園庭の中に九メートル近くの段差を取り込まなくてはならず、現実的ではないということで、あきらめた。この九メートルの高低差をデメリットではなく、メリットに変換し、都心には稀にみる豊かな自然を享受することができるとし、この敷地の特性を建築の利点とすることがこの計画の大きなテーマとなった。

先生方とのミーティングを重ねていく中で、園舎の内部空間と同様に園庭が重要であり、内外の一体的な子供の動きを可能にする構成が強く求められていることが理解され、園庭と保育室の連携が幾通りもスタディされた。中盤には、敷地の中ほどに園舎をもってきて、園庭を北庭と南庭にわけると計画が浮上した。この案であれば、高低差は建物の中に吸収されるので、高低差に対する一つの解決であるように思われた。園庭は建物を挟んで南北に分断されるが、それは運用でなんとかなるだろうという意見をいただいたが、日影図を描くと、北の園庭の過半は終日、日陰になることがわかった。しかし、それ

よりも、勾配のある敷地に対して、園舎が人工的な構築物としてそれを隠べいしてしまうような、不自然さがこの案にはあった。小川信子先生の設計された園舎には、南の庭にうまく高低差がとりこまれ、変化のある園庭が構成されていたが、自然に抗するような強引さは全く感じられなかった。

このようなプロセスを経て、最終案が決定した。敷地の南側に園舎を寄せて、一部を西側にし、L型の配置となった。もともとこの案に近い案はあったのだが、園舎の一部が三階建てになるということで、棚あげにされていた。(幼稚園設置基準で、幼稚園の園舎は二階建て以下としなければならない。)しかし、調べていくうちに、その解釈によって、一番下の階が地下階になれば、許可される可能性もあることがわかってきた。何度も区や都と協議の末、結果として、図面や模型によって、避難上問題がないことが確認され、現案に近い計画で進めることになった。この案は、自然の園庭、しかも日陰にならない園庭が一番広くとれるものであった。

大体の配置計画が定まったところで、三つの学年ごとにレベルのことなる保育室と園庭をどのようにつなぐかが課題となった。エントランスから年少組の保育室までは、段差がなくフラットにしたいという要望が出された。

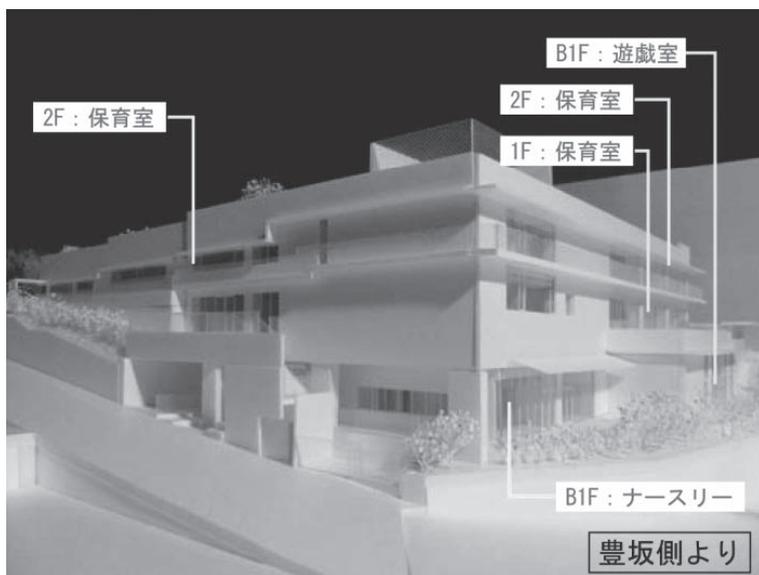
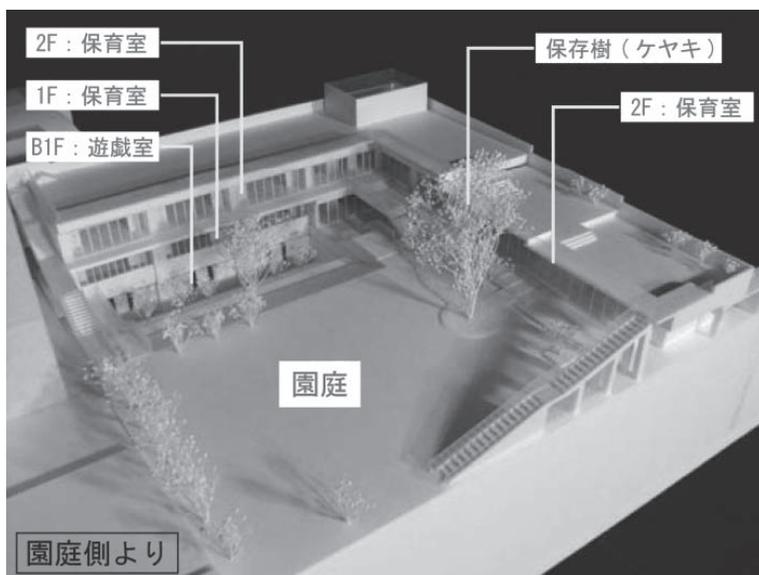


園庭側からみた新園舎

ほんの一段、二段がその場所への距離をぐっと広げてしまおうという経験は大人でもあるし、初めて体験する社会的な空間は、できるだけ子供にとってバリアのないものであってほしいという思いは十分に妥当なものであったと思う。そこでエントランスは、年少の保育室にフロアレベルを合わせ、西棟は緩やかな段上として、園庭にすりつけるようにした。

このようなプロセスを経て、年長組、年中組、年少組の各保育室のどのレベルからも、園庭へのアクセスがしやすい高さ関係が成立した。年少の保育室から北側の園庭へは二方向の階段を利用することになるが、まだ、行動半径も小さい年少の子供にとっては、コンパクトでも、保育室に連続した外部空間が重要であるということ、保育室から直接でられる広いテラスを設けている。

年中組の保育室は、順次レベルをさげて、園庭に擦り付け、園庭との連続性を高めている。年少組のときは、先生にいざなわれて、園庭に出てきた子供達が、順次自分の行動半径をひろげていく、その変化をサポートするような構成となっている。また、この保育室のみ、東向きとなり、異なる景色をもっている。この景色によって、子供たちは年少組から年中組への変化を実感してくれるのでは、と期待している。





保育室



遊戯室

子供たちが、次第に大きな空間を自分の領域に組み込んで行くように、年長組の保育室からは、傾斜地をブリッジで渡って半階おり、園庭にアプローチし、その過程で、園庭の全体を把握することができるようになっている。園庭と保育室の関係は、トイレの位置関係にも似ている。年少の保育室では、トイレは保育室の中にとりこまれ、年長組では、完全に廊下にてでから、トイレに行くことになる。行動半径が大きくなり、目的をもって行動するように、その関係を変化させている。

地階には、遊戯室とナースリーがある。遊戯室は、幅一五メートルを無柱の空間として、子供たちの活発な室内での遊び空間となり、また、二五〇名程度の園児と二五〇名程度の保護者の方々も着席できる大きさをもってゐる。

さくらナースリーは、出入りのし易さ、避難の確実性から南側の地階、道路に近いところに配置した。そのアクセスは、豊坂と目白通り側から想定されており、目白通り側からは、スロープを下り、幼稚園と共用のエレベーターを利用することが可能になっている。

さくらナースリーの内部空間は、今後の使い方によってそれぞれが柔軟に仕切れることを念頭において、〇・一歳児ほふく室と二歳児・三歳児の保育室の大きく二室から構成されている。エントランスホール脇にスタッフルームと、その並びに外から調理の様子がのぞける調理室を備えており、廊下の突き当たりには、豊明幼稚園につながる扉が設置されている。その扉を開くとすぐに幼稚園の遊戯室に行くことができ、豊明幼稚園の園児の延長保育への対応に配慮し、ナースリー、幼稚園の連続的なプログラムを可能とする平面計画となっている。

また、地階といっても、実際は地上階で、南面か



遊びの空間として残された傾斜地

ら十分な採光が得られ、南にささやかながら専用の園庭を持っている。その園庭には、既存樹木の桜が残され、大きな傘のように園庭を覆っている。このさくらをはじめ、北側園庭のスダジイや樺といった大きな既存樹木を残したままの工事は大変困難であり、施工の方々の思いによって残されたこの敷地の財産ということが出来る。

基本計画は、その後戸田建設の設計部の方々に引き継がれて、基本設計、実施設計へと進んでいった。その中で、基本計画と大きくことなつたのは、園庭の形状である。基本計画では、遊

る。基本計画では、遊戯室の壁面までフラットに園庭をもつてくる予定であつたが、この計画では、遊戯室の壁に大きな土庄がかかり、コスト的、構造的に合理的でないということになった。

最終的にそこを傾斜地として残すことになった。この傾面の活用については、様々な意

見が出されたが、幼稚園の先生方からの発案で、積極的に遊び空間として取り込まれることになった。

外装は、打ち放しを基調とし、一部分に山吹き色に近いアースカラー（学園の建物のテーマカラー）を使用している。内装は、木製のフローリングとシナ合板の内壁を基調としており、外装の吹き付けや内装のビニールクロスといった一般的に使用される表層をただ覆うような仕上げ材を極力さけて、いずれも、素材の色をそのまま表現することを意図している。

子供たちにとって最初の社会的空間である幼稚園やナースリーは、素材も構成も明らかかなものであってほしいと考えた。地形に沿った配置計画、素材の質感をできるだけそのまま表した外観、内観はそのような考えから決定された。

建物は竣工したが、建築は使われることによってどんどん成長し、発見されていくものだ。先生方や園児たちによって、この建築はどんどん新たにデザインされていくに違いない。豊明幼稚園とさくらナースリーの改築の計画に関わった一人として、その変化を楽しみにつめて行きたいと思っている。

（日本女子大学家政学部住居学科教授

しのはら やまこ）

日本女子大学附属豊明幼稚園新園舎改築工事概要

設置場所

(地名地番) 東京都文京区目白台一丁目 39-3, 40 番地

(住居表示) 東京都文京区目白台一丁目 18 番 14 号

主要用途 幼稚園、保育所

工事種別 改築

工期 着工 2009 年 10 月 1 日 竣工 2010 年 1 月 31 日
延 16 ヶ月

建築物最高高さ 13.209m

構造の種別 R C、一部 S R C

構造の形式 ラーメン式

地業 既製杭

耐火種別 耐火建築物

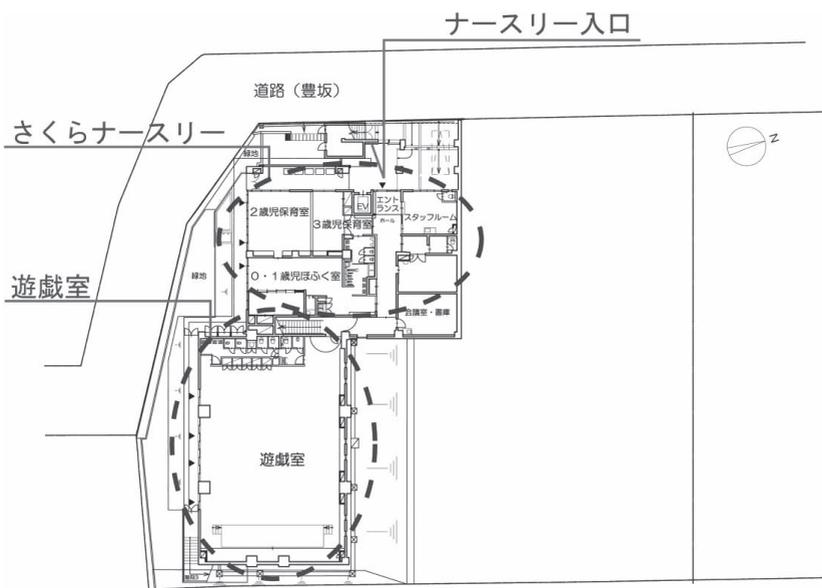
敷地面積 2633.76 m² (796.71 坪)

主要面積 (基準法上の面積) 全て申請部分

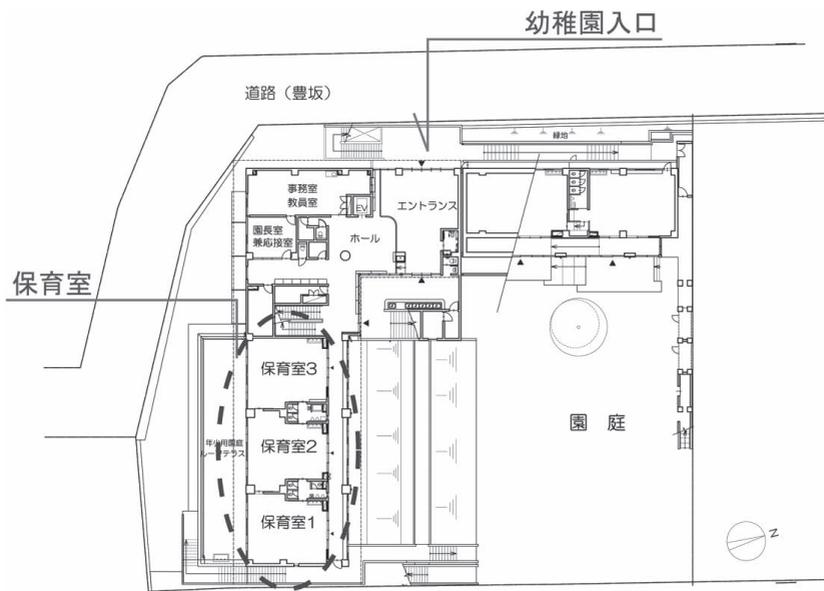
建築面積 1107.76 m² (335.10 坪)

延べ面積 2145.40 m² (648.98 坪)

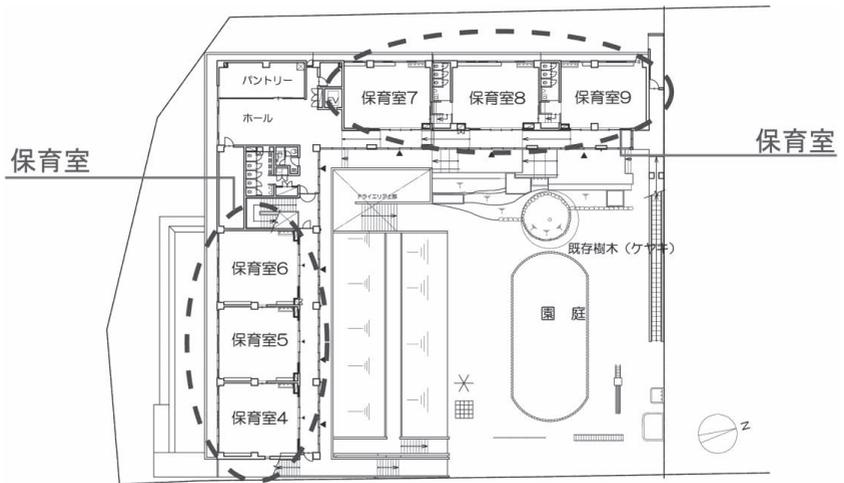
容積対象床面積 2145.40 m² (648.98 坪)



地下1階平面図



1階平面図



2階平面図

資料探訪

成瀬仁蔵の実践倫理講話

——『実践倫理講話筆記（明治三十七・三十八年度ノ部）』を読む——

片桐 芳雄

筆の人ではなく「舌の人」

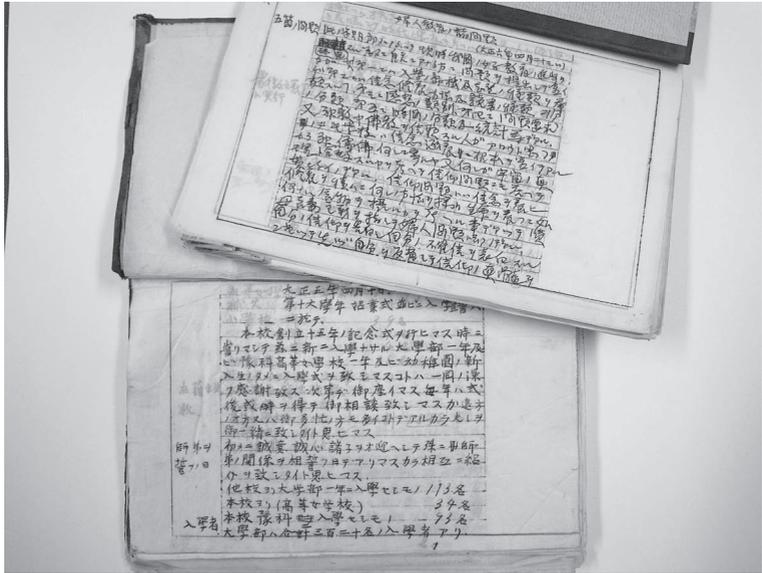
成瀬仁蔵の信頼が厚く、また良き理解者であった渡辺英一は、名著『成瀬先生伝』のなかで、次のように述べている。^①

言葉の方面での先生は、古の教祖預言者と同様に、筆の人でなく、「舌の人」であったと言っても差支えない。日記や手紙に於て、先生は随分筆まめでもあったが、併し社会的にいふところの文章はあまり書かなかつた。著述でも、全然自分だけの筆になつたといふものは英文の外に殆どない。

そうであるとするなら、日本女子大学に所蔵されている『実践倫理講話筆記』と題する資料は、「舌の人」で

あつた成瀬仁蔵の思想を、より直接的に伝えるものとしてきわめて重要である。

『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述／実践倫理講話筆記』は、一九〇五（明治三八）年度から一九一六（大正五）年度までであるが、現在、成瀬記念館によつて一九〇五年度（一部前年度分を含む）から〇八年度分と一九一五年度から一六年度分（一部翌年度分を含む）が翻刻されている。これは、各年度に成瀬仁蔵が学生向けに行なつた実践倫理の授業を中心に、入学式、卒業式、始業式あるいは桜楓会例会での講話等を月日順に収載したものであり、その量は年度ごとで相当のものになる。その年度に成瀬が何に関心を持ち、何を考え、何を学生たちに



実践倫理講話筆記

語ろうとしたのが、具体的に分かる貴重な資料である。もとより、成瀬仁蔵の講話は、その後『家庭週報』などに掲載され、さらに『成瀬仁蔵著作集』に収録されたものも少なくない。しかし『家庭週報』などに掲載される過程で、当然のことながら内容の整理や推敲が行なわれた。例えば「秋ハ毎年秋ノ此頃ニナルト何時デモ少シ疲レマス。昨晚ナドモ三度ホド目ガサメマシテ寢床ヲカヘタリイロイロシテ、ヤツト眠リニツキマシタ。」(05・9・30)といったきわめて個人的な事項は活字化されることはなかったし、また「私ハ七ツノ時、七人バカリ斬罪ニ処セラル、処ノ仕置場ヘ大人ニ頼ンデ伴レテ行ツテ貰タ事ガアリマス。其罪人達ヲ見ルト実ニ萎レタモノデ、マルデ死ンダヨーナ色ニナツテ居リマス。コエ云フ人ハ通常臆病ナ人ト言ヒマス。トコロガ其中ニ六人ノモノガ皆中ニ入ツテ最後ニ馬ニ乗ツテ来タ人ガ中々元気ナ人デアル。(中略)コエ云フノハ血氣ノ勇デアル、肉体ノ勇デアル。」(同年11・27)といった、いささか衝撃的な体験談も、公表される時には削除されている。

公開された文章に掲載されなかった部分をほじくり返すような行為は、成瀬仁蔵本人にとっては迷惑なことであるかもしれない。また、そもそもこれらの筆記は成瀬本人に直接依頼された卒業生が行なったものであるが、

テープレコーダもなかった当時、どの程度忠実に筆記されたのかは分からない。しかし成瀬記念館によれば、成瀬はこれらの筆記に自ら目を通して確認している、という。

とは言え、思わず口にしたことと推敲して文章にしたことのどちらにその人の真意が表れているか、と問えば、前者のみに本音が表れるとは一概に言えない。

しかし、「猫ハ嫌ヒデアルケレドモ、外国デ一室ヲ借りテ只一人自炊ヲシテ居タ頃ニ猫ガ一匹居タノデ、大層慰メラレテ友達トナツタコトガアル。」(06・3・27)と述べつつ、人間にとつての *sociality* の重要性を述べているところには、成瀬仁蔵の手柄をより身近に感じることができるとし、また「我国ノ社会ノ中等以上ニアル男子ニシテ腐敗セヌモノハ殆ドナイ。千人ニ対スル七百八人ト云フモノ実ニ病人デアアル、手負ヒデアアル。(中略)アナタ方ハ婦人ノ領分デアアル処ノ家庭ニ入ッテ暗黒ヲ照ラシ、其害毒ヲ清メルヨリ外ハナイノデアアル。」(05・11・12)といった言葉には、日本女子大学校を支えた多くの男性協力者に対しては表立って言いにくい、成瀬仁蔵の隠された本音が語られている、と考えることができるのではないだろうか。

講話筆記の魅力

私は、昨年の夏休み、桜楓会の成瀬先生研究会の報告のために、最近、すなわち前年秋に成瀬記念館から刊行された『実践倫理講話筆記(明治三十七・三十八年度ノ部)』を読みながら過ごした。この夏は記録的な猛暑であつた。その暑さの中で、B5版二段組み片仮名書きで、四〇〇字詰め原稿用紙で換算すると一八〇〇枚ぐらいになると思われる冊子を読み通すことは容易ではなかつた。しかしそれは、それほど苦ではなかつたのである。

教育史上の重要人物、ペスタロッチについて、「私ハアナタ方ニ白状シマス。私ハペスタロッチ先生ニ長所ト欠点トアルヨ一ニ、欠点ガアリマス。アナタ方モ亦先生ノヨ一ニ弱点ノアルコトヲオ考ヘデシヨ一。」(06・1・14)と、まるで肉親であるかのような親しみをこめて、ペスタロッチの教育活動と思想への共鳴を、きわめて熱っぽく学生たちに語っていることは、私にとつては全く意外な発見であつたし、この年の前半、主として最上級生の三年生をめぐって、家政と国文二学部の学生の対立解消に、成瀬校長が腐心するに姿は、なにやら身につまされるものがあつたからである。

成瀬校長の認識では、家政と国文との対立の根源は、単に二学部学生の感情的対立によるのではなく、要する

に文学と科学との関係の問題であり、意志と感情の合一の問題であった。六月一四日の講話で成瀬は学生に、次のように語りかける。

私ハマダドーモ充分ニ皆サンガ此間カラ申シタ事ガ腹ニオ入りニナラヌカト思ヒマス。此間カラ私ノ宅ヘオ出デニナツタ方ガアリマスガ、其人ノ言ハル、ノニ、先生ハ飽ク迄モ意志ノ人デアツテ感情ノ人デハオアリナサラナイ。夫レガ御成功ナサレタ所以デシヨウガ、私ハ情ノ人デアリマスカラ道理ヲ以テ説キ聞カサレルトワカラナクナル、ト云フ話デアリマシタケレドモ、之ハ前ニ説明シタツモリデアリマス。意志ノ人、情ノ人ト云フ様ナモノハ実ハナイノデアル。

自宅にまで押し掛けてきた学生を前にして、困惑する成瀬仁蔵の姿を想像すると、暑さを忘れて大いに同情したものである。

Positivism と オーギュスト・コント

『実践倫理講話筆記（明治三十七・三十八年度ノ部）』の冒頭近くに、一九〇五年三月二九日に行われた「研究科生並ビニ卒業生ノ為メニ」という講話が掲載されている。

る。ここで成瀬仁蔵は「本校ノ教育ハ Positive education デアル。此処デ教ヘテ居ル処ノ文学ハ Positive literature、此処デ教ヘル修身ハ Positive moral、此処デ教ヘル科学ハ Positive science、此処デ教ヘル料理ハ Positive cookery、本校デ教ヘテ居ル所ノモノハ皆 Positive ト云フ詞ヲ添ヘナケレバナラヌ。（中略）故ニアナタ方ノ今後オトリニナル境遇ハ Positive life、アナタ方ノ結婚ハ Positive marriage、アナタ方ノナサル教育ハ Positive education ト云フ風ニ、悉ク Positive デス。」と述べている。

ここで言う Positivism は社会学の創始者、フランスのオーギュスト・コントが主張した人間精神進歩の歴史三段階説、すなわち神学的段階 Theological stage、形而上学的段階 Metaphysical stage、実証的段階 Positive stage に依拠している。

コントによれば、超自然的観念がすべてを支配した古代・中世は Theological stage、近代科学が登場したルネサンス以後は Metaphysical stage、そして現代から未来は、科学（学問）の力によって事実を検証することのできる理想の時代としての Positive stage である。

成瀬の「進歩」の思想は、基本的にこのコントの歴史三段階説に依っている。

成瀬はしばしばコペルニクスの地動説が、人々の認識

を、自己中心の人間観から宇宙的な人間観へとまさにコペルニクス的に転回させたことを述べ、さらにはダーウインの進化論が人間精神に与えた歴史的意義を強調する。科学の力を信じ、学問や哲学の力によって宗教的信念をも明らかにすることができると考えた点で、成瀬仁蔵はコントの思想に共感するものがあつたと思われる。なおコントの Positive は一般に「実証的」と訳されるが、成瀬は「実践的」あるいは「積極的」という意味にも引きつけて理解した。上引の講話でも「実践的」の意味合いが濃い。ここには成瀬の個性が表れている。³⁾

ウィリアム・ジェイムズの影響

宗教的信念を学問的に、Positive に（実証的に）明らかにしよう（し得る）と考えたこの時期の成瀬に、もう一人大きな影響を与えたのは、成瀬と個人的な親交もあつたと思われるアメリカの心理学者であり宗教学者でありプラグマティストでもあつたウィリアム・ジェイムズである。成瀬仁蔵に対するジェイムズの影響は、すでに諸書によって明らかにされているところである。成瀬に影響を与えたジェイムズの著作として、影山礼子氏は主として『プラグマティズム』を挙げ、大森秀子氏は主として『宗教的経験の諸相』を挙げている。³⁾

たしかに、成瀬仁蔵に対するジェイムズの影響は、相当に大きかつたと思われるが、それがどのようなものであつたかという点は、さらに研究すべき重要な課題である。しかし、私がここで注目しておきたいのは、当時の日本の知識人でジェイムズの影響を受けたのは成瀬仁蔵だけではなかつたということである。

近代日本の知の巨人、というべき、西田幾多郎や夏目漱石も、そして宮澤賢治も、成瀬と同様、ジェイムズの影響を受けたのであつた。⁴⁾

とりわけ西田幾多郎の『善の研究』は、ジェイムズの影響を強く受けていることで知られるが、「世界はこのようなもの、人生はこのようなものという哲学的世界観および人生観と、人間はかくせねばならぬ、かかる処に安心せねばならぬという道德宗教の実践的要求とは密接な関係を持つてゐる。人は相容れない知識的確信と実践的要求とをもつて満足することはできない。（中略）元来真理は一である。知識においての真理は直に実践上の真理であり、実践上の真理は直に知識においての真理でなければならぬ。深く考へる人、真摯なる人は必ず知識と情意との一致を求むるようになる。」（六三頁）と論じる西田幾多郎の「知識的確信」と「実践的要求」との関係についての認識は、成瀬の実践倫理講話の内容とそれ

ほど遠い所にあるのではない。

『善の研究』は、西田幾多郎の第四高等学校（金沢）時代の講義がもとになったものであり、その講義録が冊子となり最初に学生に頒たれたのは一九〇六年ごろであったといふ。

西田は金沢の地で一〇代後半の男子エリート学生に向つて、他方成瀬は東京の地で同じく一〇代後半の女子エリート学生に向つて、まさに同じ時期に、彼らの生き方の確信を示す実践的倫理のあり方を、同様の視点から語つていたのである。

「萬有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」との言葉を残して一高生・藤村操が華嚴の滝から身を投げたのは一九〇三年、当時、青年の心の問題は、解決すべき時代の問題でもあった。富国強兵、殖産興業の国家目的が一応達成されることよつて生み出された青年の心の空洞化の問題、小説『こゝろ』を持ち出すまでもなく、夏目漱石もまた青年の心の問題を主要なテーマにした作家であつた。これら三人が同様にジェイムズに惹かれたのは、それを求める時代があつたからに他ならない。

連続講話・宗教問題

一九〇五年度の実践倫理講話は、〇六年三月、卒業を

間近にひかえた三年生と二年生との合同授業として行われた宗教問題に関する三回にわたる連続講話で終わる。

この連続講話は「精神的生命」と題して同年の桜楓会会報『花紅葉』第三号に掲載され、『成瀬仁蔵著作集』第二巻にも収載されている。

成瀬は三月二六日の一回目の講話の冒頭で、以下のよう

に述べる。

私ガ宗教問題ヲ始メマシテ多クノ疑問ガ未ダアナタ方ノ心ニ残ツテ居ルデアロト思フ。ソー云フ深イ疑問ヲ起サセテ置イテ、段々基礎ノ上ニ考ヘヲ築イテイテ遂ニアナタ方ノ難問題ニ答ヘガ出来ルヨリニシテ、夫レカラ後ニ宗教ノ生命ノアル所ニ達スルツモリデアリマス。然ルニ時ガ足ラヌ為ニ最早三年生トオ別レスルヨリニナリマシタ。已ムヲ得ズ今日ト明日トノ間ニ宗教ノ其ノ生命ノアル所ニ説キ及ボシテ、願ハクハ永久変ラナイ否始終進歩シテ行ク所ノ命ヲ皆サンガオ得ニナルコトヲ切望スルノデス。(中略)私ハ暗示ヲ与ヘマス。夫レヲ受ケテ働クモノハアナタ方デアル。到底一カラ百迄説クコトハ出来ナイ。殊ニ私ガ立テテ順序ヲ追フテ進ムコトガ出来マセヌカラ、此僅カノ時ニ其考ヘヲ現ハスコトガ困難デアル。故ニ到底私ガ最初

希望シテ居ツタ所迄進ムコトハ出来ナイト考ヘマス。
ケレドモ将來進ンデオ行キニナル方角丈ケハワカルデ
アロー。

成瀬は、翌二七日の講話の冒頭でも、「処ガ其最モ深
イ所ニナリマスト中々之ヲ詞ニハ言ヒ現ハシクイノデ
ス。マシテ僅カナル時間ニ余リ順序ニ従フコト能ハズシ
テ説キマスカラ、私自ラ感ジテ居ル所、自分ノ目ニ見エ
テ居ル所ノモノヲ丁度皆サンニ現ハスコトガ出来ルカ否
ヤハ心配デアル。」といった、や、弁解がましい断りを
繰り返している。

たしかに成瀬の言うとおり、この連続講話の内容は分
かりにくい。これは、成瀬が言うように、時間が足りな
いので十分説明ができないといった理由だけではなく、
じつは成瀬自身の認識が、この段階では十分深まってい
なかつたことの表れだつたのではないかと思われる。

成瀬仁蔵は、自ら得た確信を、それを得た者の高みか
ら学生に説き聞かせたのではなかつた。彼自身が、当時
の先端的な学問を学び、それを学生に説く中で自らの確
信を得ようとしたのではなかつたか。

彼が実践倫理を説きながら、自らの確信をどのよう
にして得たか、彼が後年「信念徹底」と言うときの成瀬に

とつての「信念」とは何であつたか。成瀬仁蔵の実践倫
理講話は、成瀬自身の「信念」探求の道程そのものであ
つたのではなからうか。

『著作集』に整理された論稿からだけではなく、その
生の声から彼の思想の実像に迫る作業は、いまだ我々の
前に残されていると思われる。

(日本女子大学人間社会学部教育学科教授

かたぎり よしお)

《注》

- (1) 仁科節編纂『成瀬先生伝』(桜楓会出版部、一九二八
年)三〇六頁。
- (2) 成瀬仁蔵と社会学的思想との関係については山本鎮雄
氏の「成瀬仁蔵の社会学的世界―受容と実践―」(『日
本女子大学紀要・文学部』一九八九年)などの研究が
ある。
- (3) 影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想』(風間書房、一九九
四年)。大森秀子『多元的宗教教育の成立過程』(東信
堂、二〇〇九年)。
- (4) 伊藤邦武『ジェイムズの多元的宇宙論』(岩波書店、
二〇〇九年)参照。
- (5) 下村寅太郎「解題」『善の研究』(岩波文庫、一九七九
年改版)。

『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話二編である。式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話

1

四十二年度計画発表会 ―明治四十二年四月十八日―

始めの御方には、今日三年生から全体に発表なさった計画が余りに複雑でありまして、其の關係が一寸おわかりにくいかも知れない。又わかるに致しても、其の必要なること又夫れを銘々で充実に行く方法等について、

或は疑問があるかも知れぬ。もし時があるならば、その疑問にお答へになることが必要である―と思ひますけれども、今日は時がないから其の疑問に答へると云ふことを省き

ますが、その云ふことについて発表した六回生の係やら、いろいろの出版物などをお読みになることが必要である—と思ひます。

本校の真相を知れ

初めには何を見ても聞いても、凡て物新らしいから随分興味もあることと思ひますから、始めに於て充分本校の真相をわかるよ—になさることも、あなた方の為に大切である—と思ふ。

夫れで細かいことに批評を加へる暇はありませんから、之れは追々と申すことに致して、今日は只、全体が力を入れて実行しよ—と云ふ、校風を發達させよ—と云ふ計畫につきまして、一言、皆さんに考へが起るよ—に申しておきたいと思ひます。

校風

本校が教育の目的を全うする為めに、校風に重きをおいたのである。校風或は学風を健全に育て、行くと云ふことに最も力を用ひたと云ふことは、本校の歴史に充分に現れて居る処である。

本校が始めて開設せられて第一学年を開くに当りまして、つまり開校式の翌日か其の翌日であつたかと思ふ、大学部第一回生並に附属高等女学校一同を只今の裁縫室によせまして、私が一番最初に申しましたことは、校風を作らんければならないと云ふことでありました。何故に校風を作ることが教育に一番大切であると云ふことを我々が感じたかと申しますと、第一、私が本校を創立する時に大切な条件として又大切な経験として教へたことは、其の前に二、三の学校を経営致して、其の時に自分が得ました処の経験から考へた処の一つの理想であります。夫れが即ち此の校風を作ることと寄宿舎を家族制度にすると云ふよ—なことであつた。も—一つの理由は、先年海外を視察致しまして、歐米の教育が実に校風によつて出来て居る、校風と云ふものが如何に大切な關係を持つて居るかと思ふことを見出だしまして、斯くの如き理由に由りまして校風の大切なることを深く感じて居つて、此の学校を興す当初から其処に大に力を注いだのである。之れは以前には繰り返して全校にお話をしたことであるが、多分只今の三年生頃からは、も—説き明かす必要がないよ—に考へまして、余り其の必要をお話し致さなかつた様に思ふ。故に其の校風が如何に大切なものであるか、又其の校風を育てるには今年発表なさつた

よゝな機関が必要であると云ふことを、充分わかつて戴きたいのであります。新にお入りになつた方々は、余り校風と云ふ詞でもお聞きにならないであらう。又生徒が自動的に働いて行くと云ふ経験はお持ちにならないことと察しますが、本校にお入りになって斯くの如き詞を聞いて、又そゝ云ふ生活をしよゝとするとときに、不思議なる又珍らしいと云ふよゝな感じが必ず起るであらうと考へる。併し其の校風が如何に実力養成の爲めに又修養の爲めに、又今後の国民教育の爲めに、国家發展の上に如何に必要であるかと云ふことも、余り氣付かないでおいでになるかと思ひます。

其処で其の辺について深く考へ、又之れを問題として皆さんが始めにおいて研究なさることが必要であります。過日、一言、三年生には話したと思ふが、校風と云ふこと、之れは英語で言ふと、インナーライフと言ひます。即ち内面的の生命とでも訳しませうか。此のインナーライフと云ふ字は誠によい字であります。此の大学のインナーライフ、社会国家のインナーライフ又は家庭の即ち風、そこで家には家風と云ふのがあり、国には国風と云ふものがあり、郷党には其の郷党の風と云ふものがある。ここで初めてお目にかかつて、あなたは何県のお方であるかと云ふことを聞かないでも、暫く御交際をして居る

と、此のお方は何県のお方であらうと云ふことが略ぼ察せらるるのであります。

其の国風或は校風と云ふものは何所に現はれて居るかと云ふと、やはり銘々の感情、習慣、銘々の行ひ、銘々の品性、銘々の人格と云ふものに現はるのである。そこで我々の確信、主義或は本心、各々の趣味、傾向と云ふよゝなものも皆關係して、纏まふて居る人格と云ふものに皆現はれて居るのである。如何となれば、我々の人格、我々の信仰、我々の傾きと云ふものは、其の家風、国風と云ふものが拵へたのである。我々の己れの性質、己れの知識、己れの信仰、己れの主義と云ふものは、自分の力で拵へたもの、様に思ふが、無論或る意味で言へばそゝであるが、も一つ深い關係から言へば、そゝ云ふ風と云ふもの、社会国家の中に生きて居るインナーライフ、其の風と云ふものが集つて拵へたものであります。故に我々が今後立派なる人になるには、学校に居る時は其の校風により、家庭に入れば其の家風と云ふものから影響を被ると云ふことは免れられない。又我々が教育を受けるのは斯くの如き感化を受け、又及ぼすと云ふことにある。つまり品性を修養することと、校風を充実すると云ふことは一致するのである。又我々の人格と云ふものと校風又は国風と云ふものは必ず互に相一致し、相関

係する所があります。故に我々に一旦出来た所の品格と云ふものは容易に変へることの出来ないものである。夫れと同じよーに、我々に出来た所の僻と云ふものも、中々改められないものであります。此の命を抛つと云ふ決心が出来なければ、中々むつかしいのである。

斯くの如く一旦出来上つた校風と云ふものは容易に之れを破壊し、之れを滅ぼすことは出来ないものであります。夫れと同じよーに、一旦拵へた悪傾向と云ふものは容易にかへることは出来ない。

然るに国民を生み出したる所の母親である、国風の淵源である所の我が国の学校は、如何なる校風を養ひ来たつたのであるか。其の長所は何れにあるか、又短所は何れにあるかと云ふことを考へねばならぬ。此の頃、現文部大臣の高等師範に於て演説せられた祝辞の中の御報告によりますると、驚くべき事実があります。夫れは我が国教育界に於て、学校騒動と云ふものが五年の間に五十幾度行はれたと云ふことであります。独り男子の学校に於けるのみならず、女学校においてすらも、尚ほ学校騒動と云ふものを我々は耳にするのである。之れは何を現はして居るか。学校騒動と云ふものは学生が先生に向つて攻撃をするのである。甚しきに至つては我が師を暗殺せんと迄するのである。又は学生間に於て党を結び派を作

つて、途中で待ち伏せをして居つてなぐると云ふ様なこともある。誠に殺風景な状態にあるのである。之れだけ外部に向つて火の手があがるのであるから、其の内部はどーであるかと云ふと、互に競争して己れの地位を高めよー、利益を充分にしよー、そのためにいろいろな嫉妬心、忿怒心と云ふものを貯へるのである。此の師弟の關係、親子の關係を以つて一家族の生活を営まなければならぬ。学校、国民の母たる学校に於て斯くの如くであるから、其の国風は必ず之れに類似したものであると云ふことは、察するに難からざるのみならず、斯くの如き醜態が今日暴露しつつかあるのである。故に一旦斯くの如き傾向に傾くや、如何なる政治家も、如何なる教育家も、如何なる宗教家も之れを挽回することはむつかしい。容易なることでは之れを矯めることは出来ないのである。之れは暗黒面を見たのであるが、我が国教育界に斯くの如き弊風を生じ、其の生み出したる国民が斯くの如き醜態を演じつつかあることを見て、我は悲しまざるを得ないのであります。故に之れを救ふには到底その根本を改めなければ外に道はないのである。国民の本は家庭にあり、家庭の本は女子にある。女子の本は女学校にあるのである。其女学校を健全にするのは校風を養ふにある。我々国家の上から言つても、個人の上から言つても、此の校

風を健全にしなければならぬと云ふことは明らかであります。

夫れで私は只今、殊に教育部に御注意を致したい。殊に私は我国家の教育改善に力を尽したいと思ふのは、到底我国家は斯くの如き教育に依つて維持することは出来ない、どして其の根本から改めんければならぬと信ずるからであります。今年皆さんが校風充実と云ふことに骨をお折りになるのも、茲に気づかれてでありませう。

何故に我國の学風は衰へたか、何故に我國の教育の結果は不充分であるか、何故に其の力は薄弱であるか、何故に其の教育の神聖は汚されたか、其の原因は何処にあるかと云ふことだけは、充分に皆さんが御気づきになることを希望するのである。何故であるか、茲に論ずる時間はありません。只私は其の要点だけを申しておきます。之れに就いて一言申すならば、第一の原因は今日の教育が校風に重きをおく事に気づかない。如何に之れが大切なものであるかと云ふ事を、未だ我國民は充分に自覚しないのである。如何となれば、教育の本の本である帝国大学、其の他の大学、高等教育府に於ては、本校に感じて居る様に、全体を統一する精神を養ふとか、そゝ云ふ機関を設けるとか云ふことを欠いて居る。其の機関の一つとして、斯くの如き講堂紀念式とか祭日とか云ふ

時に於て、精神的生命を發するため、大きなホールなりチャペルなりを興して、全体の生命を育てると云ふことが行はれない。其の形はあるけれども、實はないのである。内容は皆無である。其の必要も感じない。教授の方でも心づかないのみならず、又、学生の方でも一向構はないのであります。そこで偉大なる精神を養ひ、全校を統一すると云ふよゝな働きは取らないのである。一言で言へば、我國の教育では此の校風の大切なことを認めない。又斯くの如き生活を営まない。又も少し平たい詞で言ふならば、社会性を養はないのである。人のために奉仕すると云ふよゝな精神を養はない。只我学問、我名誉と云ふことのみ汲々として居る。

学校騒動の大原因

之れが学校騒動の大原因である。之れが社会的事業の挙がらない所以であります。夫れを気づかないと云ふことが、遂に斯くの如き国風の起つて来た所の原因であると言はんければならない。

第二には、我國の教育は如何に致しても只知と云ふ一方に傾いて居る。其の知と云ふものも試験に及第する為の間に合せの知識であつて、本物にならない。即ち我國

の教育は品性修養、人格養成と云ふことを欠いで居る。大学教育を受ける模範的国民、国家の指導者たる国民も、只職人である。其の土台に必ず高尚なる人格を備へんければならぬ。模範的国民たる品性を備へんければならぬ。其の他師範学校に於ても、そゝである。真に感化を及ぼさんければならない教員すらも、其の品性を養はない。之れが師範学校から出た教員の世間から賤しまれる本である。どゝしても模範的国民を養ふには、賢母良妻を作るには、此の人格を養ふことを忘れてはなりません。此の人格を養ふには、修養に發展、努力に骨を折らねばならぬ。

第三には、今日の学問が只家の中に止まり、只書物の上に働いて居るのである。到底今日の教育、今後の国民教育には、そゝ云ふ偏頗な教育に依つて目的を達することとは出来ない。之れは矢張、試験制度と云ふよゝなこと、其の学問の目的の違つて居る所から来て居るのである。本校が自治機関を設け一見複雑なよゝであるが、実は

之れが今日の教育に最も大切なものであつて、知識をかたらしむる所のものである。其の知識が真に命となり、活動となるためにおかれてある。学問が嫌ひになり、学校なり校長なりに反抗して見たくなる、之れも我国の弊である。

然るに今日は学生を機械的に扱はふこととして居るが、そんなことは出来るものではない。こゝ云ふ根本を改良するに非ざれば、到底我が国民を今後本当に必要な国民とすることは出来ません。

私は、本校が校風を養ふと云ふことに骨を折るのはどゝ云ふ訳で大切であるか、今日の学生が間に合はないと云ふ批評は何故に起るかと思ふことが、お解りになることが必要であると思ふ。故にどゝか今年はその根本からお養ひになるよゝに。殊に記念式と云ふよゝな時は、本校の歴史を思ひ起して全体を紹介するに誠によい時で、こゝ云ふ時に於て、其の校風を益々健全に発達させることが必要であると思へます。

第一学年にて — 明治四十二年四月二十四日 —

問題

水曜日に纏めて出だすべき問題

- (1) 姓名、生地、現住所。
- (2) 本校に入学する迄の境遇、郷里、家庭及び学校。
- (3) 自己の性質、習慣、健康に付きて。
- (4) 本大学へ入学せし志、及び其の動機。
- (5) 入学後の経験、即ち感想とか又は新に発見したる事。或は新しき考へ起りて、ど一云ふ風に決心したと云ふ様な事。
- (6) 今考へて居る所の問題。(之は入学前より本校の評判など聞き居りて、今猶其の真偽に苦み居る事等)

御銘々の委しい事は書いてお出し下さる事として、私は猶講義を始める前に、全体の傾向を知りたいと思ひま

す。

高等教育を受けて、如何なる人にならんとするか。即ち今最も要求するものは何か。

各自の本校に入学せし目的

- (1) 人となる為め。
- (2) 力ある人となる為め。
- (3) 意志の自由。
- (4) 女徳を發揮する事。
- (5) 立派なる人格を養ふ事 — 学識ある人となる為め。
- (6) 自動の能力を得る為め。
- (7) 精神的生命を得る為め。
- (8) 感化力ある婦人となる事。

皆さんが今詞に表された所は相異つて居るが、併し大

学に進んでお入りになった所の根本の精神は一つに帰するのである。そして本校の主義、精神のある所をよく弁へて、やはり銘々深い考へを持つてお入りになった事は、是によつてわかるのであります。そしてあなた方のお考へが間違つて居ないと思ふのであります。此の人となる、と云ふ中には凡ての事が含まるのであります、力と云ふ事の中にも其の他のいろいろのものが入るのでありますから、且つは、皆根本の力を養はう、ほんとの人たる品性を発現しよ、と云ふ事に帰するのであります。夫れで大抵わかつて居りますが、今度は其の目的を達するには方法と云ふものが入る。夫れは如何にすればよいかと云ふ事になる。そこで、も一少し之を解剖して具体的にせねばならぬ。茲に婦人の美德とか女徳とか云ふものがある。故に之を益々發揮して、失はぬよーにせねばならぬと同時に、古来我が国の婦人にある所の弱点と云ふものもある。夫れはどーしても教育によつて改善しなければならぬ。そこで古来我国女性の痼疾となつて居る所の弱点は何でありましょーか。そのわかつて居る人は答へて御覽。

我国婦人の欠点

- (1) 依頼心。
- (2) 夫を助けることもできぬ。
- (3) 心が狭い。
- (4) 社会性が發達して居らぬ事。

そー云ふ様な事がいろいろあるが、一体我国の婦人は弱い方が沢山あるよーですな。身体が弱いと云ふ事もあつるが、多くの病氣は頭から出るのである。あなた方は今勢よく上へ上へと進んで行きよるが、何所迄上つて行かるといふか。男と女との主なる違ひは、男は何時迄も夫れが下らない。女は四十五位になると、も一凡ての力がとまつて段々下つて来ると言ふ。之は今研究中ではありますが、女は一般に早く衰へる。其所から先づ身体が弱つて来て、其の結果は煩悶病になる。こー云ふ事を今の詞では、ヒステリーと言ふが、昔は貝原先生などは五病と称へ、儒教の方でも東洋にては、女と小人と並べて言ふ。そーして東洋の宗教である所の仏教の方でも、女は甚だ宣しくないものとなつて居る。そー云ふよーな事凡てをさして、弱いと言ふ。又意志の自由と云ふ事を仰つたのであるが、私共の身体の強い時は自由があるが、病氣になるとすつくり自由を失ふのである。夫れと同じ

よーに、婦人の弱い所からいろいろな欠点がある。そー云ふ欠点からして家庭が治まらなかつたり、夫婦の間が睦まじく行かなかつたり、其の結果、子孫迄も不幸ならしむると云ふ事がある。そこで、之はどーしても将来我国家の爲めに改めねばならぬ。つまりあなた方が力とか、意志の自由とか、女徳の發揮とか云ふ事をお重じなさるのは、皆此に帰するのである。然らば、其の根本については如何なる方法をとる事が一番大切であるか。之が、あなた方の業を始むるに當つて最も大切な問題である。

心意状態

先づ身体の方はおきまして、心の方を分けると、知情意の三つとなります。此の知情意と云ふものは別々に分解する事は出来ぬけれども、頭で考へる、学問をする、知識と云ふよーな事を主にする時は、知と言ひます。又想像したり美を感じたりする事は之を情と言ひ、物をするとか奮闘するとか云ふ時には意と申します。

そこで先づ此の知情意と云ふうちで、我国御婦人は知と云ふものは長所であるか、欠点であるか。欠点であると思ふものは………多数。

情は………短所。意は………短所。

併し又、情をわけて感情、情緒及び情操と言ひます。感情は極低い所のもので、誰にもある。動物にでもある所のものである。情緒と言へば、もー少し高尚なもので、他愛とか親に孝行するとか云ふものである。夫れから今度ももつと一般的になって、真理を愛するとか、美術を愛するとか云ふ事になると、之を情操と言ひます。そー云ふ風に我々の情と云ふものにも階段があるのであるが、其の低い情に支配せらるゝ人を感情の人と言ひ、高尚な情に導かるる人を情神の人と言ひます。皆さん、どーお思ひですか。婦人は此の三つの中のいづれに長じて居りますか。

・感情の人

そーすると、我が国婦人の欠点とも言ふべきものは何であろーか。其の欠点を補ふて、一層完全なる徳を發揮するには如何にすればよいであろーか。昔は知と思つたのであるが、今日の判断に於ては、意に欠けて居ると云ふ事になりました。何が出来て居ないかと言ふと、意が出来てないのである。夫れで今日は先き程仰つた精神的生命、之も昔は情と思つたのであるが、今日では意であるのです。昔は学問と云ふことは知であると思つて居たけれども、今日はやはり意であると云ふ事になつた。どーしても我々は先づ意力を養はねばならぬ。

詞をかへて言へば、人間の土台は英語で言ふ Will 意志である。そこで教育の目的は善意を養ふ、即ち善い意志を養成すると云ふ事にある。力を發揮すると云ふのは意志を作る、意力を発現すると云ふ事になる。殊に御婦人がヒステリーになり、愚痴になり、狭くなるのは、我々国婦人の意志が薄弱であると云ふ事に帰するのであります。そこで昔は学問をすると言へば、博識になる、唯物を博く覚えて居って、夫れを口に答へればよかつたのであるが、そゝ云ふものは生きた字引きである。書物である。所謂、論語読みの論語知らずである。今日の学問の目的は意力を養ふ事。即ち物の出来る人、熱烈なる信仰ある人、真の意力となる事が、即ち人格のある永久的の命となるのである。此の意力を養はねば、ほんとの立派なる知識、立派なる感情ともならないのであります。之が文学をする人も、科学をする人も、凡て学問をする者の一般的の目的とならねばならないのである。そこで次に、之を養ふには如何にすればよいかと云ふ其の方法を説くについては、生理の事から、心理の事から、及び宇宙の目的から、広く研究しなければならぬ。之は、其の道に従へば確に之が真理であると云ふ事の解釈が得らるる事であつて、ほんとして我々の生命ともなるのであります。



ており、その子どもたちも共に教育を受けている。異なる宗教を信奉する人びとを兄弟愛と平和への等しい熱意のうちにまとめあげる努力がなされ、それが「婦一」運動の提唱に至ったのである。いまやこの協会は他の国々にも広がり、宗教問題のみならず経済、政治、産業といったあらゆる問題についても検討事項に含めるようになっていく。

成瀬先生はアメリカでの両方の目的の遂行のために、男子カレッジと女子カレッジを併せて、ニューイングランドと中西部の諸大学をすでに訪問した。残りの滞在期間中にニューヨークとフィラデルフィアおよびその近辺で教育問題を研究する意向である。成瀬先生の訪問の結果として、日本女子大学の女子学生が当地の女子大学のいくつかでさらに進んだ研究ができるように、奨学制度ができるかもしれない。「何だかんだ申しても、アメリカの方々がお考えになっている以上に、両者は似ておりますし、そして常にずっと、ますます似てきているのです、アメリカの女子学生と日本の女子学生は。」と、成瀬先生は言った。

翻訳：川端 康雄／佐久間 妙美（成瀬記念館）

- (1) 正確を期するならば「日本女子大学の学長」ではなく「日本女子大学の校長」とすべきだが、英語原文が“President of Japan Women’s University”なのでこうしておく。「訳者改題」に記した原則を参照。
- (2) 成瀬 17 歳、すなわち 1875 年にスミス・カレッジ、ウェルズリー・カレッジが開学。英国ケンブリッジ大学の女子カレッジとしてのニューナム・カレッジの設立は 1871 年だが、その中心施設となるニューナム・ホールのオープンは 1875 年だった。
- (3) 「もうひとつの学校」とは、新潟女学校のことと思われるが、その開校年は 1887 年だった。
- (4) 「1900 年 4 月」に開校とあるが、もちろん「1901 年 4 月」の誤りである。

ことができるでしょう。]

女子大学には、家政学部、英文学部、教育学部、文学部の4つの学部がある。要求される一定の学問的要件はすべての課程で共通している。その基準はアメリカの女子学生であれば「かなり厳しい」と言うくらいのものである。大学生活は、学生寮があり、クラブがあり、運動があり、「自己研鑽」の組織があり、多くの意味でアメリカの大学と非常に似ている。日本女子大学のパンフレットを見ると、成瀬学長が日本とアメリカの女子学生が似ているという印象を受けたと述べた真意がわかる。

日本には女性参政権の運動家がない

日本には女性参政権運動がない。成瀬先生はアメリカにいるときは女性参政権論者だが、日本では違う。

「日本では女性参政権運動はありませんし、参政権にあまり関心がありません。まだ機が熟していません。いわゆる「女性の諸権利」に物静かで遠慮深く、また控えめで小さな日本の女子のためのいわゆる「女性の諸権利」をいませきたてるのは大きな間違いでしょう。少なくとも何らかの政治的な意味で、男性に伍して世界のなかでひとつの役割を担うにはまだ適していません。女性たちは——つい最近まで——何世紀もの間、隔離されてきたのです。

アメリカ人女性の場合は話が違います。機敏で、現代的で、すでに思索と産業に関わる世界に進出しており、すでに男性の仲間であり、国の政治的な活動のなかに自分の地位を占めることが十分にできます。すでに能力があって、進歩的で「解放」されているアメリカ人女性に対して参政権を否定することは私には馬鹿げたことに見えます。そのような運動を、アメリカにおいてはいま私が支持しているように、いつか日本の場合も支持することになるでしょう。しかし、まだ早いです。」

成瀬先生がこの秋にこの国を訪れたのは、ひとつにはアメリカの諸大学についてさらなる調査を行ってこの19年間にそれらの大学がどのような進歩を遂げたかを見るためであり、もうひとつには、「婦一協会」の国際的な活動を促進するためである。この組織は国際的な友愛と寛容を通して普遍的な平和を希求する運動体であり、成瀬先生が数ヶ月前に日本で立ち上げたものである。この協会は、日本で宗教が多岐にわたっている問題に何とか取り組んでそれを解決しなければならないという、日本人の認識から発展したのだった。

キリスト教、仏教、神道の信者たちが日本では共に暮らしたり働いたりし

性を単なる道具や機械とみなし、家事労働や種の繁殖のためだけの定めとみなす風潮は広くあり、そのような見方に対して、女性を人として、自分自身の抱負を持つ人として教育することによって、闘う必要があると私たちは感じています。しかし私たちは、家庭生活は女性の主要な領域であることを強調し、健全に、かつ幅広く、女性を家庭生活になじませることを目指しています。彼女の家庭における立場は道具でも飾り物でもなく、国民精神の積極的な参加者としてであります。私たちは極端な保守と極端な革新のどちらも避けることを目指します。私たちは卒業生たちに、束縛を受けない自由行為者として、彼女たち自身の人生における特別な使命を理解してもらいたいのです。過去において、女性たちは自分自身の人格の価値をわかっていませんでした。飾り物のように扱われるのをよしとしてきました。私たちはいわゆる女性の権利を求めて働いているのではなく、女性が自身の価値と責任を意識してもらうために活動しているのです。コスモポリタニズムを説いて聞かせようとしているのではなく、真に人道的な精神を広めることを追求しているのです。

私たちの卒業生の大多数は結婚します。約 10 パーセントが国内各地のさまざまな高等〔女〕学校の教師になります。さらに 10 パーセントが執筆活動に携わります。正看護婦になる者も非常に多くいます。多くはありませんが、医学校に行って医者になるのも若干名います。日本に女医はわずかしかおらず、女性弁護士はおりません。女性の職業や仕事は、もちろん、アメリカのように多岐にわたって開かれてはいません。それでも年を経るごとに進歩が見られるのです。

そしてわが学生たちは以前にもましてアメリカの女子学生に似てきています。学問に対する同じ熱意を持ち、大いなる抱負を持っています。そしてまた、まさにアメリカの女子と同様に運動にも興味を持っています。バスケットボールやホッケー、テニスをはじめ、あなたがたのあらゆるスポーツをしますし、また同じく日本の競技もします。学ぶ教科もアメリカの女子と同じようなものです——数学、物理、化学、植物学、動物学、鉱物学、倫理学、心理学、歴史、美術史、教育学、英文学、衛生学といった教科です。加えて、裁縫、園芸、哲学、中国文学、そしてまた日本文学、家政学、そして——アメリカ人には全く奇妙に見えるでしょうが——なんと礼法の科目があります。おわかりのように、日本の礼法はとても複雑なので他の科目とともに本当に学んでいかなければならないのです。ですから、大学を見学されると、学生が、例えばカリキュラムの一環として、凝った茶会に参加している姿を見る

校として知られるこの学校は、キリスト教の学校である。日本女子大学は宗教色が無い。プリンマー・カレッジが創立された1883年、成瀬先生は日本にもう一つの女学校を開いた。女性が教育を受けることは女性の人生における本当の役割にとってそぐわない、という古臭い批判に日本の「ヨーロッパ化」への反動が結晶化されていた21年前の当時、彼は女子大学を創設する道を懸命に模索していた。

いわゆる「日本主義」と呼ばれた、当時盛んであった動きは女子教育に反対の立場をとっていたが、成瀬先生の若い心に影響を与えた。彼はこの愛国心というものが単に古い「国家主義」の堅持に拠って奉仕されるべきものだと信じていなかったが、日本の女性のための教育は日本独自の教育でなければならず、たとえ最良のものであっても外国の教育制度を過度に模倣するものであってはならない、と考えるようになったのである。そこで成瀬先生は、自分自身の国の女性の生活環境と、何が必要とされるかを、それまで以上につぶさに研究し、そしてアメリカに渡り、この地で最も進歩を遂げている場所に赴いて、教育の研究に打ち込んだのだった。

1896年に、日本の女性たちの高等教育が必要であると信じる日本の思想的指導者たちは、日本での女子大学の創設を検討する会合を持った。成瀬先生と女子大学の支持者たちは4年間、寄附を募って全国を回った。1900年4月に女子大学が開校した。それは日本の女性に革命をもたらしたのである。そしてそれに反対する議論は、奇妙なまでに私たちの耳にも聞き慣れたものである。

女子大などに行かせたら、女たちは高慢なうぬぼれ屋になるだろう、と日本の男たちは言ったのである。日本古来の女性らしい優雅さと柔らかな物腰を失ってしまうだろう。家庭生活や家事、子どもの養育、それに結婚さえ避けるようになり、独立した自由な暮らしを求めるようになるだろう。そしてどういう訳だかわからないが、健康を害し、母親としてふさわしくない状態になるだろう、と言うのである。

「これらの批判はひとつずつ論破されました。アメリカやイギリスでも論破されてきましたが、ちょうどそれと同じことです。」と成瀬先生は述べた。

女性を人として教育する

「私たちの目的は、いままでもそしてこれからもずっと、女性を人として、女性として、そしてコミュニティの一員として教育することにあります。女

った。「これが健やかな物の見方を助長するのです。これによって女子は、一面的な女らしさに陥ることを回避できるのです。これが彼女に全人格的な成長の機会を与えるのです。大学の女性は多方面で有能な女性です。私は彼女の人生に対する態度と教育の恩恵を要約するのに「健全」以上の言葉を思いつきません。大学で学ぶことによって婚期が遅れるということ、女性らしさを磨くのが数年遅くなるという事実そのものが、体の健康をいっそう助長するものであるように私には見えます。

アメリカの女性は常にきわめて自由でありました。教育はアメリカ人女性の解放をいっそう助長することに寄与したのに過ぎません。しかし日本では女子大学こそが、女性の隔絶された状態をまるごと打ち壊したのです。」

日本の女性高等教育の確立の物語は成瀬先生が17歳の少年だった頃の経験にさかのぼる。その年はスミス・カレッジとウェルズリー・カレッジがこの国に設立され、ニューナム・ホールがイギリスのケンブリッジ大学の附属施設としてオープンした年⁽²⁾で、日本ではちょうど革命の困難を乗り越えたところであった。まだほんの少年だった成瀬仁蔵を、日本の女性が置かれた無知と隷属の最悪の状態に突如として結びつけるある出来事が起こり、それを契機として彼は、日本の女性の教育のために尽力しようという決心を即決したのだった。

女子無能論に対する闘い

事を為すまでに何年もが過ぎた。しかし成瀬仁蔵が成人し、フィリプス・アンドーヴァー神学校とウースターのクラーク大学で教育を受けたとき、彼が女子無能論と呼んだものをなくすためにひとつの教育制度を打ち立てようとして闘いを始め、それを勝ち取ったのである。

女性教育のための成瀬先生の最初の仕事は大阪に女学校を創立したとき〔1878年〕に始まった。梅花女学



学寮

難を受けることがあります。いまや私は甘やかされているとは思いません。また、利己的だとも思いません。むしろ、個人主義者であり、まだ自身の個性の十全な発展にむけて闘っている——なお闘い続けなければならないのであっても——その最中なのです。この闘いにおいて彼女は容赦ないかもしれませんが。しかし私はそれを利己主義だとは思いません。ごく自然なことだと思います。日本女性の自制の力はすばらしいものであると個人的には思いますし、その力を失ってほしくはありません。また私は、その幾分かをアメリカ人女性に吹き込みたいと思っていることを認めなくてはなりません。しかし、私はアメリカ人女性を利己的だとも甘やかされているとも思いません。彼女は単に鋭敏で積極的なだけです。

アメリカでの教育の進歩を勉強するために戻ってきて私が特に強い印象を受けたことが2つあります。ひとつは女性のためのテクニカル・スクールの発展で、もうひとつは共学の問題とその解決方法です。

私が以前にいた頃には、共学はまったく問題にはされていませんでした。まさに等閑に附されていたのです。ここ数年の間にアメリカでは真の問題となったのであり、人びとに選択させることによってこれを見事に解決しました。私は無制限な共学というものは信じませんし、無制限な分離というのも信じません。実情を状況と個々の要求に合わせて対応するやり方がよいと信じます。そしてまさにそれこそがアメリカのできることなのです。アメリカにはバツサーのような女子だけのカレッジがありますし、オーバーリンのような正式な共学のカレッジもあります。またハーバード大学のような連携方式のカレッジがあり、そこでは女子学生がおなじコースを取り、おなじ講師についているものの、男子学生と完全に一緒に教育を受けているというわけではありません。これらすべてがすばらしいものです。

テクニカル・スクールの発展は私にはとても興味深いものです。いまでもありますが、前回こちらに参ったとき、〔職業教育ではない人文系の〕女子アカデミック・カレッジがありました。しかし今回の訪問で、別種の教育機関が2つあるのがわかりました——ピッツバーグのカーネギー工科大学を例とするような、「女性の仕事」の技術を教える、技術に特化した女子校と、ポストンのシモンズ・カレッジのような技術全般を扱う大学です。私はこれら2つが女子高等教育の最も興味深い発展形だと思います。〕

成瀬先生の高等教育への訴えは、ほとんどすべて健全さというものを基盤にしている——それは身体と、知性と、精神の健全さである。

「大学の雰囲気は健全な雰囲気で、大学の影響は健全な影響です」と彼は言

でに落ち着いています。そしてまさにこのことを私は、活発なアメリカ人女性に教えたいのです。」

「アメリカ人女性は、前回私がアメリカに滞在していたときから大きな変化を遂げました。」と、成瀬先生は続けた。「前回私がお会いした大学の女学生は比較的少なく、家庭的なタイプと学問的なタイプは分化される傾向がずっと高いものでした。当時は、アメリカ人女性の人柄に私がそれほど感銘を受けることはありませんでした。この19年間で彼女たちはめざましい進歩を遂げたのだと思います。」

それにまた、前回の訪米以降、女性の生活における教育の真の結果を見ることができるようになりました。アメリカに戻ってきて、アメリカ人女性の教育と解放がいかに健康的な生活に役立っているかがわかりました。大学教育は女性の家庭での「キャリア」の妨げになるだろうという主張が常々なされてきましたが、アメリカに戻ってアメリカ人女性に再会すると、その主張がいかに無益な謬見であるかということがわかります。」

教養ある女性の価値

「教養のある知性高き女性は、よりよき妻であり母であり、より上手に家事を切り盛りする人であります。主婦であれば、聡明な主婦です。彼女は夫のよき友であり仲間であって、慰み物や女中ではありません。自身の人格を持ち、自身の家庭をより幸福なものとし、より賢く導いています。アメリカに戻ってみて、そのようになったことを感じました。日本では、このような変化が起こるほど長くは女子教育がまだ行われていません。」

「アメリカ人女性はしばしば利己的だと言われます。」と成瀬先生は続けた。「確かに、彼女は概して、東洋の女性のような、みずから進んで自己犠牲の行為をすることはできません。アメリカ人女性は、時に甘やかされていると非



附属高等女学校生物実験室

す。』

アメリカ人女性は 積極的過ぎる

「アメリカ人女性がいささか積極的過ぎると申し上げるのは、女性らしくないという意味ではありません。まったく逆で、きわめて女性的です。それはアメリカの女性が進歩的であることの一部をなしています。積極的だからこそ女



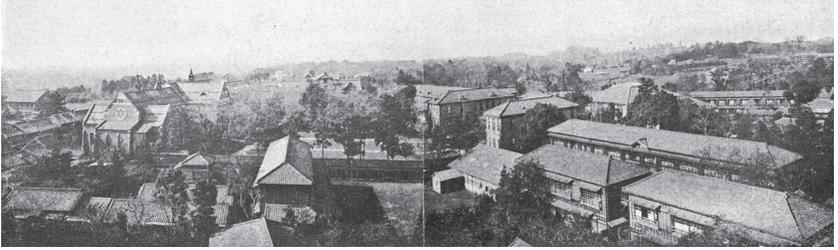
日本女子大学の物理実験室

性が女性らしさを少しも失わずに参政権獲得のために闘うことができるのだということ——アメリカの女性こそがそれをイギリスの女性に示したのであり、アメリカ人女性の女性らしさはそれによって立証されています。しかし、そうは申しても、彼女はその進歩において積極的過ぎるのです。何と申しますか、押しが強すぎるのです。落ち着きが足りません。平穏さに欠けています。彼女はいささか——」と成瀬先生は意味深長な仕草をし、それからふさわしい形容辞を見つけ出してこう言った。「あまりにも——せわしない感じがするのです。」

「知性の面では研ぎ澄まされていて、道徳面ではきわめて健全で、十分に目覚めていて、興味深く、魅力的ですが、それでもアメリカ人女性は落ち着きを必要としています。ですから、また、彼女は日本人から自己犠牲というものを学ぶことができると私は思います。アメリカ人女性は自己を犠牲にするタイプではないのですからね。

日本で私は、アメリカ人女性をお手本として掲げております。彼女の機敏さ、知性、独立独行の気性、その視野の広さについて私は話しております。これらはすばらしい特徴です。日本の女子にぜひ身につけてもらいたいと願うことです。

とはいえ、私は日本の若い女性をアメリカ人女性のお手本として掲げられたらよいと願ってもおります。と申しますのは、日本の女子は、教育を求める熱意のすべてをなかで、教育を求めて闘わなければならなかった過去12年間のなかで、もはや闘う必要のなくなった今日に至るまで、落ち着き、平静さを、冷静な姿勢を失ったことがなかったからです。彼女は常に、完璧なま



日本女子大学鳥瞰図

19年ぶりにアメリカに戻ってきた。彼が今日アメリカの状況を見て、他の何にもまして思いを強くしたのは、日本において女性が長足の進歩を遂げたということであったと言う。

成瀬先生は言う。「結局、日本の若い女性がいかにアメリカの女性に似ているかをご覧になったら、驚かれることでしょう。東京に女子大学が開かれてから12年になります。当時、日本全国でもまだ16の高等女学校しかありませんでした。いまでは200校を超えています。女子大学にはバツサー・カレッジやプリンマー・カレッジと同じ年齢の学生たちが1,100人います。彼女たちがバスケットボールをしている光景は見物ですよ」

東京の女子大学が率直にお手本にしたのは、アメリカのどれかひとつの大学ではなく、アメリカの教育制度全般であった。そして、成瀬先生は、日本の女性を見くびるわけでも、また過大評価するつもりでもないが、彼が日本の女性教育を力説し始めたときに念頭にあったのは、アメリカの女性とその生き方であったことを、同じように率直に認めている。

彼は言う。「アメリカの女性はユニークだと思います。世界で最も進歩的で積極的な女性であると申せば、アメリカ人女性に対する私の見方を要約したことになるかと思いますが——この見方は、私が以前にここで生活したときに観察したことと、この1ヶ月間アメリカで見てきたことに基づいて得られたものなのですが。

アメリカの女子大学は世界の女子高等教育の規範です。もちろん、どの国にも著名な学者はいますが、アメリカの平均的な若い女性は疑いもなく世界の若い女性の中で最高の教育を受けているのです。彼女たちの視野はより広く、その人生はより自由でありかつ分別があります。機敏で、自身の個人的な生活の外で起きていることに関心を持っています。性格的には生き生きとしているように思います。徹底して進歩的で、世界の女性をリードしていま

日本の女性たちはアメリカの姉妹のようになりつつある

東京にある日本女子大学の成瀬仁蔵学長⁽¹⁾は、アメリカの女性たちは世界のなかで最も教養高く知的であるが、日本人女性から落ち着きと物静かさを学ぶことができる、と述べている。

「19年前にアメリカに来たとき、私が最も強い印象を受けたのは、日本人女性とアメリカ人女性に甚だしい相違があるということでした。いま印象的なのは、両者が大変似ているということです。」

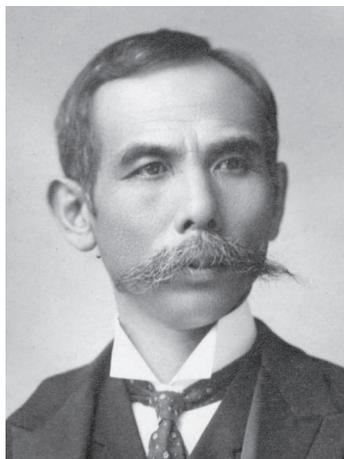
東京にある日本女子大学の創立者であり学長である成瀬仁蔵先生は、しばらく沈黙したあと、謎かけをするように微笑んだ。

「アメリカ人女性は世界の中で最も教養が高く知的です」と彼は言った。「そしてまた最も進歩的で押しが強い女性です。しかし、姉妹である日本の女性から物腰の柔らかさや落ち着きのいくばくかを学びとることが出来るのではないかと思います。私たちが称讃してやまないアメリカ人の見事な教育を、日本において私たちの女子にも与えようと努めているところです。しかし私は、アメリカの女子も東洋から学ぶことが出来るのではないかとしばしば思うのです。」

成瀬先生は、女性のための「高等教育」を日本に初めてもたらした人である。

日本において——おそらくは東洋において誰よりも——東洋の女性の教育と解放のために尽力されている。教育と自由に関して言えば、今日の日本人女性が4半世紀前の日本人女性よりもアメリカ人女性のほうに似かよってきているというのは、成瀬先生のお蔭である。日本で初めての女子大学設立は成瀬先生にとって幾年にもわたる闘いを意味し、日本の若い女性たちにとってはそれは、事実上、革命に等しいものである。

成瀬先生はいまこの国を訪問中である。アメリカで教育を受け、アメリカの諸々の機関をよく知り、アメリカの多数の学者とも親交のあるこの人物が、



日本女子大学学長 成瀬仁蔵先生、東京

est little Japanese girl at present would be a great mistake. She is not yet fitted to take a part in the world along with men, in any political sense at least. She has been behind her—too close behind her—so many centuries of seclusion.

“For the American woman it is different; she is alert, up-to-date, already out in the world of thought and industry, already the companion of man and entirely able to take her place in the political life of the nation. It seems to me that to deny suffrage to the already capable, progressive, and ‘emancipated’ American woman is a foolish thing. Some time in Japan I shall favor, as I now favor in America, such a movement. But not yet.”

Dr. Naruse has come to this country this Fall partly to make a further study of American colleges and their progress in the past nineteen years, and partly to forward the international work of the Concordia Association. This organization is the movement for universal peace through international friendship and tolerance that Dr. Naruse first set on foot in Japan several months ago. The association grew first from the Japanese realization that the problems of the varying religions in Japan must somehow be met and solved.

Followers of the Christian, Buddhist, and Shinto faiths live and work side by side in Japan, their sons and daughters educated together. It was the effort to bring together the peoples of the different religions in an equal zest for brotherliness and peace that suggested the Concordia movement. Now the association is spreading to other nations, and is including the consideration of all economic, political, industrial, as well as religious problems.

In the pursuance of both his aims in America Dr. Naruse has already visited the colleges, both for men and women, of New England and the Middle West. During the remainder of his stay here he will study the problem of education in and about New York and Philadelphia. It is possible that as a result of Dr. Naruse’s visit scholarships may be established by which girls from the Japan Women’s University may take advanced work at some of the women’s colleges here.

“After all, they are more alike than you in America realize, and they are getting more alike all the time,” said Dr. Naruse, “the girls of America and the girls of Japan.”

tarian spirit.

“The great majority of our graduates marry. About 10 per cent become teachers in the various high schools of the country. Ten per cent more write. A great many become trained nurses. Some few—not many—go to medical schools and become doctors. We have a few woman doctors in Japan, no woman lawyers. The professions and occupations for women are, of course, not open to anything like the extent that they are in America. And yet every year we see a progress.

“And our students become more like yours. They have the same zest for learning, and they have great aspirations. Then, too, they are just as interested in athletics as are American girls. They play basketball, field hockey, tennis, all your sports, as well as the Japanese games. They study much the same things as you girls do—mathematics, physics, chemistry, botany, zoology, mineralogy, ethics, psychology, history, history of art, pedagogics, English, hygiene. And in addition they have courses in sewing, horticulture, philosophy, Chinese as well as Japanese literature, domestic science, and—what will no doubt seem strange to an American—etiquette! You see, the Japanese etiquette is such an elaborate thing that we really must study it along with our other courses. And so if you go to the college you will see the students going through with, for instance, the ornate tea ceremony as a part of their curriculum.”

There are four departments in the university—domestic science, English literature, pedagogics, and literature. Certain academic requirements are common to all courses. The standard is what an American college girl would call “pretty stiff.” The life of the college, with its student boarding houses, its clubs, its athletics, its “self-training” organizations, is in many ways very like a college of our own. Looking over the catalogue of the Japan Women’s University one realizes what the President means when he says that he is impressed with the similarity between Japanese and America girls.

No Suffragists in Japan.

There is no woman suffrage movement in Japan. Dr. Naruse is a suffragist when he is in America, but he is not a suffragist in Japan.

“In Japan we have no suffrage movement, nor any interest in suffrage. We are not ready for it yet. To urge so-called ‘women’s rights’ for the quiet, retiring, mod-

of Japan must be Japanese education, not modeled too closely upon even the best of foreign systems. So Dr. Naruse made a closer study than he had yet done of the living conditions and the needs of the women of his own country, and then he went to America to study education in the country where it had made the greatest progress.

In 1896 the leaders of Japanese thought who believed in the higher education of the Japanese women held a meeting to consider the establishment of a university for women in Japan. For four years Dr. Naruse and the other advocates of college education for women went all over the country soliciting funds. In April, 1900, the university was opened. It has revolutionized the women of Japan. And the arguments that were urged against it sound strangely familiar in our ears.

It would make women proud and conceited, the Japanese men said; it would cause them to lose the refinement and mild demeanor characteristic of Japanese womanhood; it would lead them to eschew home life, housework, child nurture, and even marriage, and to seek an independent and free life; and in some mysterious way it would injure their health and unfit them for motherhood.

“These criticisms have been met and answered one by one,” said Dr. Naruse, “just as they have been met and answered in America and England.

Educated Women Human.

“Our aim was, and always will be, to educate women as human beings, as women, and as members of the community. There is always a widespread tendency to regard woman merely as a tool or machine, destined solely for service at home and for the propagation of the race; we feel the need of combating that view, in educating women as human beings with aspirations of their own. But we emphasize home life as a woman’s chief sphere, and we aim, sanely and broadly, to fit her for it. Her place in the home is not as a tool or ornament, but as an active partaker in the national spirit. We aim to avoid both conservative and radical extremes. We want our graduates understand their own special mission in life, as free agents. In the past women have not realized the worth of their own personalities. They have been willing to be treated as ornaments. We are not working for any so-called woman’s rights, but for woman’s consciousness of her worth and responsibilities. And we do not seek to inculcate cosmopolitanism, but to forward a really humani-

The college woman is an all-around woman. I know of no better word than 'healthy' to sum up her attitude toward life and the benefits of her education. The very fact that her college course puts off marriage and the cares of womanhood for several years makes, it seems to me, for better physical health.

"In America your women have always been quite free; education has but helped along their greater emancipation. But in Japan it is the entire seclusion of women that has gone down before the woman's college."

The story of the establishment of higher education for women in Japan goes back to an experience of Dr. Naruse when he was a boy of seventeen. It was the year in which Smith and Wellesley Colleges were founded in this country, and Newnham Hall opened as an adjunct to Cambridge University in England; Japan was just getting over the revolution. An incident that brought Jinzo Naruse, only a boy then, into sudden contact with all that was worst in the ignorance and enslavement of the women of Japan aroused in him the quick determination to do something for women's education.

Fight Against Woman's Inefficiency.

It was years before anything could be done. But when Jinzo Naruse was a man, and educated at Phillips Andover and at Clark University at Worcester, he began and won his fight for a system of education to do away with what he had begun to call women's inefficiency.

Dr. Naruse's first work for women's education began when he founded a school for girls in Osaka. The school, known as the Baikajogakko Institution, is a Christian school. The Women's University is non-sectarian. In 1883, the year in which Bryn Mawr College was founded, Dr. Naruse opened another school for girls in Japan, and was eagerly preparing the way for the establishment of a college when the reaction of twenty-one years ago against the "Europeanization" of Japan crystallized the old-fashioned criticism against education for women in declaring that it made them unfit for their real function in life.

However active the so-called "Nippon Shugi" movement was in the opposition against women's education, it had its influence upon young Dr. Naruse's mind. He did not believe that patriotism was to be served merely by keeping hold of the old "national principles," but he did come to understand that education for the women

she is not, as a rule, so capable of spontaneous self-sacrifice as is the woman of the Orient. The American woman is sometimes accused of being spoiled. Now, I do not think that she is spoiled, and I do not think that she is selfish. Rather, I think that she is an individualist, struggling still—even she has yet to struggle—for the full development of her individuality. In this struggle she may be relentless. But I do not call that selfishness, and I think it is perfectly natural. I personally think that the Japanese girl's power of renunciation is a fine thing, and I do not want to see her lose it; I must admit, too, that I'd like to infuse some of it into the American girl. But I certainly do not consider the American woman selfish or spoiled. She is merely alert and aggressive.

“Two things impress me particularly as I come back to study the progress of education in America. One is the growth of technical schools for women and the other is the problem of co-education and the way it is being solved.

“When I was here the last time co-education was not a problem at all. It was simply ignored. In the past years it has grown to be a real problem with you, and you are solving it admirably in letting people take a choice. I don't believe in unlimited co-education, and I don't believe in unlimited segregation. I believe in suiting the case to the circumstances and individual demands, and that is just what, in America, you are able to do. You have your colleges for women only, like Vassar; you have your regular co-educational colleges like Oberlin, and you have your co-operative colleges like Harvard, where the girl students have the same courses and the same lecturers, yet are not educated altogether with the boys. And excellent things all these are.

“The development of the technical school is very interesting to me. When I was here before you had your academic woman's college, as you still do. But now I find two other kinds of institutions—the very technical woman's school, to teach the technique of ‘woman's work,’ such as is exemplified in the Carnegie Institute in Pittsburgh, and the general technical college, like Simmons College in Boston. I find these both most interesting developments of the higher education of women.”

Dr. Naruse's plea for the “higher education” is founded almost entirely upon health—physical, mental, and spiritual health.

“The atmosphere of a college is a healthy atmosphere,” he said, “and the influence of a college is a healthy influence. It makes for a sane viewpoint. It gets a girl away from a one-sided femininity. It gives her whole nature a chance to develop.

Keenly alive intellectually, thoroughly healthy morally, wide-awake, interesting, charming, the American woman still needs poise. Then, too, she could learn, I think, self-sacrifice from the Japanese. The American woman is not a self-sacrificing type.

“In Japan I hold up the American woman as a model; I speak of her alertness, her intelligence, her self-reliance, her breadth of view. These are fine things. They are things that I wish the girl of Japan to acquire.

“But I wish I could hold up the young woman of Japan as a model to the American, too. For in all her zeal for an education, in all these past twelve years when she had to fight for an education, down to this present day when she need fight no longer, the Japanese girl has never lost her repose, her quiet, self-possessed bearing; she is always perfectly poised. And that is what I should like to teach to your strenuous American girls.

“The American woman has changed a great deal since I was in America last,” Dr. Naruse went on. “Then I met comparatively few college women, and the domestic and academic types were more apt to be differentiated. I was not at that time so struck with the personality of the American woman. I think she has advanced a good deal in the past nineteen years.

“Also since I was here before it has become possible to see the real results of education on the lives of women. I can see, coming back to America, how the education and emancipation of the American woman are making for a healthier life. The argument that college education will stand in the way of a woman’s domestic ‘career’ has always been urged; as I return to America and meet your American women again I see how futile and wrong that argument is.

Value of an Educated Woman.

“The educated, intelligent woman is the better wife and mother, the better homemaker. She is an intelligent housekeeper if she keeps house. She is a friend and companion to her husband and not a plaything or a domestic servant. She has an individuality of her own, and so she makes her home happier and directs it more wisely. Coming back to America, I can see that these things have happened. We have not had education long enough to see them happen in Japan.

“The American woman is often called selfish,” Dr. Naruse went on. “Certainly

en are like yours. It is twelve years since the Women's University at Tokio was opened. At that time there were only sixteen high schools for girls in all Japan. Now there are more than 200. There are about 1,100 students in the Women's University, about the same age as your students at Vassar and Bryn Mawr. And you should see them play basket ball!"

The Women's University in Tokio was frankly modeled, not on any one American college, but on the general system of education in America; and Dr. Naruse admits as frankly that although he had no desire on the one hand to underrate or on the other hand to make over his fellow-countrywomen, he had the American girl and her manner of living in his mind when he began to urge the education of the women of Japan.

"The woman of America is, I think, unique," he said. "When I say that she is the most progressive and the most aggressive woman on earth I think I sum up my idea of her—an idea that, by the way, is founded on the observation of my life here years ago and of what I have seen in this past month in America.

"The American college for women is the standard of higher education for women all over the world. There are, of course, notable scholars in every country, yet the average American young woman is without doubt the best-educated young woman in the world. Her horizon is broader, her life is at once more free and more sane. She is more alert, more interested in what is going on outside her own life. Her personality is, I think, more vivid. She is thoroughly progressive; she leads the women of the world.

American Women Too Aggressive.

"When I say that the woman of America is somewhat too aggressive, I do not mean that she is not womanly. On the contrary, she is most womanly; that is a part of her progressiveness; it has taken the women of America to show the women of England that women can fight for suffrage without losing one bit of their womanliness, and the womanliness of the American woman stands attested by that. But she is too aggressive in her progress, just the same. She pushes out so—so strenuously. She has not enough repose of manner. She is not well poised. She isn't quiet enough. She's a bit—" Dr. Naruse made an expressive gesture before he found the adjective that fitted it—"she is too—too jerky.

JAPAN'S WOMEN GROWING LIKE THEIR AMERICAN SISTERS

Dr. Jinzo Naruse, President of Japan Women's University of Tokio, Says While Our Women Are Best Educated and Most Intelligent in the World, They Could Learn Poise and Quietness from the Japanese.

"When I was in America nineteen years ago what impressed me most was the vast difference between the Japanese and American young women. What impresses me now is their similarity."

Dr. Jinzo Naruse, founder and President of the Japan Women's University at Tokio, paused for a moment, and smiled, quizzically.

"The American woman is the best educated and the most intelligent woman in the world," he said. "She is the most progressive and the most aggressive of women. But she would do well to learn something of the poise and the quietness of her Japanese sister. In Japan we are trying to give our girls the splendid education of the Americans, whom we admire so much. But I have often thought that even the girls of America could learn from the Orient."

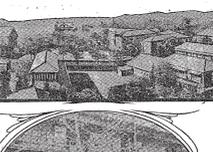
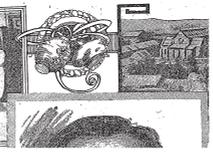
Dr. Naruse is the man who first introduced the "higher education" for women into Japan. More than anyone else in Japan—probably more than anyone else in the East—he has worked for the education and the emancipation of the women of the Orient. That the Japanese woman of to-day is, as regards education and freedom, much more like the woman of America than she is like the Japanese girl of a quarter of a century ago, is something for which she has Dr. Naruse to thank. The establishment of the first woman's college in Japan meant for Dr. Naruse the fight of years; what it meant for the young women of Japan amounts practically to revolution.

Dr. Naruse is visiting in this country now. Educated in America, acquainted with American institutions, counting many friends among American scholars, he is returning to this country, after an absence of nineteen years. And what he sees in America to-day impresses him more strongly than anything else has done, he says, with the progress that women have made in Japan.

"You would be surprised," he said, "to see how much, after all, our young wom-

JAPAN'S WOMEN GROWING LIKE THEIR AMERICAN SISTERS

They are now being educated in the same manner as their American counterparts. They are now being educated in the same manner as their American counterparts. They are now being educated in the same manner as their American counterparts.



High-Rise View of Japan Women

Dr. Jinzo Naruse, President of Japan Women's University of Tokio, Says While Our Women Are Best Educated and Most Intelligent in the World, They Could Learn Poise and Quietness from the Japanese.

WHEN I was an American student in Japan, I was struck by the poise and quietness of the Japanese women. They were the most intelligent in the world, but they could learn poise and quietness from the Japanese.

The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.



Dr. Jinzo Naruse, President of the Japan Women's University, Tokio

I think it is perfectly correct. I just don't think that the Japanese women are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Japan appreciated the educational system which educated the women of the East. It was the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

There is no woman more intelligent than the American woman. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Women of an Enlarged World.
The American women in the East are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world. They are the most intelligent in the world.

Continued on page 10

ページ (<http://query.nytimes.com>) の「アーカイヴ」に収められている。記者がこの記事にぶつかったのは 2009 年の暮れのこと、担当している学務の関係で大学の教育理念の英訳について頭を悩ませていたとき、“Jinzo Naruse” を含む複数のキーワードを打ち込んで検索をかけたところ、たまたまこの記事がヒットして、初めてこれを読むことになった。当初、この記事は学園史に暗い訳者が知らなかっただけのことで、成瀬記念館の資料にすでに含まれているものと思ったのだが、念のために問い合わせしてみると、写真図版は知られているものであっても、この記事そのものは所蔵していないというご回答を得た。少なくとも現在、その存在をご存知の方も周囲におられないらしい。そこでこのたび、成瀬仁蔵の 1912 年当時の英語での談話が聞ける貴重な「新資料」であるということなので、このインタビューの本文を復刻し、それに日本語訳を附す運びとなった。復刻と英訳の作業はまず成瀬記念館スタッフの手をわずらわせ、それに川端が修正と訳注を加えるかたちで進めた。

こうした歴史資料を翻訳する際に直面する悩ましい問題が、訳語をその時代の使用者の流儀にあわせて「古風」に（すなわち本稿の場合は、成瀬自身の女子教育を語る日本語の語彙に）するか、あるいは「現代風」にするかという点である。たとえば woman という単語ひとつとっても、「婦人」とするか「女性」とするか、迷うことになる。今回の訳では後者を原則とした。この記事で日本女子大学の建学の精神を説明しているくんだりで成瀬は、“Our aim was, and always will be, to educate women as human beings, as women, and as members of the community.” と述べている。ここは「私たちの目的は、いままでもそしてこれからもずっと、女性を人として、女性として、そしてコミュニティの一員として教育することにあります。」と訳すことにして、「……女子を人として、婦人として、国民として教育することにあります」と「原文」に戻すことは敢えてしなかった。むしろ本稿の訳文は、成瀬の英語によるインタビューという貴重な資料への添え物として、英語での「肉声」を読む際の補助として利用していただくのがよいと判断してのことである。上記の例で附言すれば、成瀬が「国民として」にあたる部分を英語で“as members of the community” と表現しているのを目にして、「そうだったのか」と、訳者は思わず膝を打ったのだった。

(日本女子大学文学部英文学教授 かわばた やすお)

資料紹介

成瀬仁蔵インタビュー

——『ニューヨークタイムズ』1912年11月10日——

川端 康雄

アメリカの主要な日刊紙『ニューヨークタイムズ』（1851年創刊）の1912年11月10日号に成瀬仁蔵へのインタビュー記事が掲載された。当時2度目の米国滞在中であった成瀬に対して、同紙の記者が訪米の目的や、日米の女子学生を比較した上での女子教育観を問うて、それに成瀬が答えるかたちでの英語によるロング・インタビューである。成瀬の顔写真、および当時の日本女子大学（校）のキャンパスや授業風景の写真5葉を配し、この特集記事は紙面の1ページ分のほぼ全面を費やしている（71(3)頁参照）。

1912年は日本女子大学創立後11年目にあたる。世紀転換期に大学設立に向けて奔走し、創立後は校長として熱気あふれる学園作りに邁進し、「校風の養成を主とし、之に精力を集注し、聊か堅実なる精神的基礎を築き得た」（『日本女子大学校の過去現在および将来』1911年）という確信を得た成瀬は、1912年8月から翌13年3月にかけて欧米を旅した。その目的は、本インタビューにも記されているとおり、欧米の女子教育の実情の視察と、立ち上げて間もない婦一協会の普及活動の2点に絞られた。

成瀬の一度目の訪米の旅は1890年末から1894年1月、正味3年間で、留学生としてアンドーヴァー神学校に入学後、クラーク大学で女子教育の調査・研究、さらにその他の大学機関、社会施設を見学し、帰国後の女子大学設立構想の重要なヒントを彼の地で得た。1912年の米国再訪は19年ぶりのことだった。女子大学設立に先立つ1度目の訪米から、創立10年を経て自身の女子大学での運営と教育の経験を得た成瀬がアメリカを再訪して、当地の女子学生を見たときに、日本での女子教育の進展と現状を相対化して振り返る視座を得て、いかなる感慨を抱いたか、それが記事の巧みな構成によって、このインタビューに表現されている。

近年、インターネットの普及に伴って、新聞・雑誌によっては、過去の記事をデータベース化し、しばしば万人にアクセスできるようなサービスを提供している。この記事もその例に洩れず、ニューヨークタイムズ社のホーム

成瀬記念館

二〇一〇年度・活動の記録

二〇一〇年度業務日誌

- 4・30 附属中学校1年生約250名、教職員20名見学(分館も)、説明。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 14名見学、説明
- 5・7 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名見学、説明。大学見学の高校生(1校) 5名、自由見学
- 5・12 住居学科学生11名分館見学
- 5・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 9名見学、説明。入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ35名分館見学、説明(5・20も33名見学、説明)
- 5・14 文京ミューズネット全体会議出席
- 5・15 泉会総会のため13時半まで延長開館、見学者30名(土曜日)
- 5・26 桜映画社、映画「くらしを衣裳で残す」改訂版のため撮影
- 5・28 文京区へ荻太郎遺作展のため作品貸出
- 5・29 専任学芸員採用面接
- 6・1 展示オープン(目白本館)
- 6・2 マウント・ホリヨーク・カレッジの学生10名、教員1名見学(分館も)、説明
- 6・3 入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ43名見学、説明(6・17に14名、7・8に10名)。西生田記念室、入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ16名見学、説明(休室日、6・17に6名、7・8に6名)
- 6・4 10女子大学の学生生活部の集まりの参加者10名見学、説明
- 6・8 展示オープン(西生田記念室)。
- 6・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 20名見学、説明
- 6・13 「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者約160名(日曜日)
- 6・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 22名および教員見学、説明(休館日)
- 6・15 フジテレビ、「熱血!平成教育学院」のため『青塾』創刊号撮影
- 6・18 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校) 25名見学、説明
- 6・19 西生田記念室、中学校オープンスクールのため特別開室、見学者44名(土曜日)
- 6・22 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 16名および教員見学、説明
- 4・1 「新任教員の集い」参加者見学(成瀬記念講堂も)、主事他説明
- 4・2 大学入学式につき西生田記念室開室、見学者112名
- 4・8 展示オープン(目白本館・西生田記念室)
- 4・17 桜楓会「ホームカミングデー」につき平日通り開館、見学者27名(土曜日)
- 4・19 文京区、荻太郎遺作展のため作品撮影
- 4・20 創立記念式典につき西生田記念室開室、見学者192名
- 4・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 16名および教員見学、説明
- 4・30 附属中学校1年生約250名、教職員20名見学(分館も)、説明。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 14名見学、説明
- 5・7 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 13名見学、説明。大学見学の高校生(1校) 5名、自由見学
- 5・12 住居学科学生11名分館見学
- 5・13 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 9名見学、説明。入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ35名分館見学、説明(5・20も33名見学、説明)
- 5・14 文京ミューズネット全体会議出席
- 5・15 泉会総会のため13時半まで延長開館、見学者30名(土曜日)
- 5・26 桜映画社、映画「くらしを衣裳で残す」改訂版のため撮影
- 5・28 文京区へ荻太郎遺作展のため作品貸出
- 5・29 専任学芸員採用面接
- 6・1 展示オープン(目白本館)
- 6・2 マウント・ホリヨーク・カレッジの学生10名、教員1名見学(分館も)、説明
- 6・3 入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ43名見学、説明(6・17に14名、7・8に10名)。西生田記念室、入学課から依頼のオープンキャンパス学生スタッフ16名見学、説明(休室日、6・17に6名、7・8に6名)
- 6・4 10女子大学の学生生活部の集まりの参加者10名見学、説明
- 6・8 展示オープン(西生田記念室)。
- 6・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 20名見学、説明
- 6・13 「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者約160名(日曜日)
- 6・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 22名および教員見学、説明(休館日)
- 6・15 フジテレビ、「熱血!平成教育学院」のため『青塾』創刊号撮影
- 6・18 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校) 25名見学、説明
- 6・19 西生田記念室、中学校オープンスクールのため特別開室、見学者44名(土曜日)
- 6・22 入学課から依頼の大学見学の高校生

- 生(1校) 14名および教員見学、説明。
- 成瀬記念館運営委員会
- 6・23 成瀬仁蔵生誕記念日につき分館特別公開、説明、見学者35名
- 6・26 アメリカ PUGET SOUND 大学の教授1名見学、説明(開館時間外、成瀬記念講堂も)
- 6・28 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 32名および教員見学、説明(休館日)
- 6・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 35名および教員見学、説明。人間社会学部学生、授業で56名見学、説明(成瀬記念講堂・分館も、7・10に9名)。附属豊明小学校児童38名見学(7・1に38名、7・2に39名)
- 7・1 被服学科学生、授業で17名見学、説明
- 7・5 本年度当館受入れ予定の博物館実習生3名と事前打合せ(7・6に1名)
- 7・7 通信8回生10名、自由見学(成瀬記念講堂も)
- 7・9 『写真で見る成瀬仁蔵』他納品
- 7・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 10名および教員見学、説明。
- 消防設備点検
- 7・13 全国大学史史料協議会東日本部会研究会(於国立公文書館)に出席
- 7・14 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 8名見学、説明。家政学部学生11名見学、説明(分館も)
- 7・15 JALアカデミーより14名見学、説明
- 7・16 『成瀬記念館2000 No.25』(2千部)納品。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 39名および教員見学、説明
- 7・20 広報渉外課、広報ブログ作成のため館内撮影
- 7・22 広報渉外課、大学案内のため館内撮影
- 7・28 荻太郎『子供の日』搬入
- 7・31 オープンキャンパスのため特別開館、見学者150名(土曜日)
- 8・1 西生田記念室、オープンキャンパスのため特別開室、見学者165名。キャンパス見学ツアー参加者に説明(1日約10回実施・日曜日)
- 8・5～26 夏期スクーリングのため毎週木曜日開館
- 8・5 他大学の学芸員課程担当者、11名見学、説明
- 8・7 西生田記念室、オープンキャンパスのため特別開室、見学者174名。キャンパス見学ツアー参加者に説明(1日約10回実施・土曜日)
- 8・8 オープンキャンパスのため特別開館、見学者185名(日曜日)
- 8・12 学外より、卒業生(9回生)に関する研究調査のため来館
- 8・19 ヤマハピアノサービス、豊明幼稚園旧蔵のオルガン修理のため来館(引取修理後、10・5納品)。通信教育課、入学ガイドのため館内撮影
- 8・23 徳島大学による長井長義のセミ・ドキュメンタリー映画の撮影に協力
- 8・30 消防設備点検(分館も)
- 8・31～9・7 博物館実習(4名)
- 9・6 収蔵庫系統空調機水漏れ
- 9・11 附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会のため臨時開館、見学者約30名(土曜日)
- 9・22 入学課から依頼の大学見学の高校生14名および教員・PTA見学、説明(休館日)
- 9・23 展示オープン(目白本館)。「オ

- 「ペンキャンパス」につき平日通り開館、見学者約60名(祝日)
- 9・25 桜楓会日立・水戸支部より17名見学、説明(成瀬記念講堂も)。越谷市郷土研究会73名見学、説明(成瀬記念講堂も)。散策のグループ14名見学、説明
- 9・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)約40名および教員見学、説明
- 10・1 杉崎友美着任。展示オープン(西生田記念室)。附属中学校PTA16名見学下見、説明(分館も)。入学課から依頼の大学見学の高校生15名見学、説明
- 10・6 住居学科鈴木教授と学生6名、資料閲覧
- 10・7 広報渉外課・大学案内制作業者、ロケハンのため来館、分館も
- 10・9 入学課から依頼の大学見学の高校生PTA(1校)40名見学、説明
- 10・9～10 十月祭につき西生田記念室特別開室、見学者計31名(土日曜日)
- 10・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)42名見学、説明
- 10・19 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)16名見学、説明
- 10・20 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」で10名見学(分館も)
- 10・21 防災訓練
- 10・22 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)31名および教員見学、説明。他大学教員、丹下ウメの研究調査のため来館、応対。切手の博物館学芸員、目白祭期間中の出張展示準備のため来館
- 10・23～24 目白祭につき平日通り開館、見学者合計585名。日女祭につき西生田記念室平日通り開室、見学者合計87名(土日曜日)
- 10・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)27名見学、説明
- 10・27 朝日カルチャー24名見学、説明(分館も)。入学課から依頼の大学見学の高校生(2校)37名見学、説明。広報渉外課、大学案内のため西生田記念室撮影
- 10・27～28 平成22年度女性情報アーキビスト入門講座(於・国立女性教育会館)参加(杉崎)
- 10・30～31 もみじ祭につき西生田記念室特別開室、見学者合計51名(土日曜日)
- 11・2 広報渉外課、大学案内のため目白本館撮影
- 11・8 春殖賢人ライブラリー・プロジェクトより2名、上代タノ資料閲覧
- 11・9 同志社東京ニュース担当者、取材のため来館
- 11・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)12名見学、説明
- 11・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)35名見学、説明
- 11・16 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)16名見学、説明
- 11・17 東京工業大学世界文明センターより紹介のオーストラリアの大学教員、タゴール資料閲覧のため来館。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校)4名見学、説明
- 11・19 総合研究所研究課題47「成瀬仁蔵および本学学園史研究資料データベースの構築」公開講演会開催(講師・高埜利彦学習院大学教授)
- 11・20 附属中学校説明会につき西生田記念室特別開室、見学者29名(土曜日)
- 11・22～24 来年度展示準備のため鳥取出張および創立者生誕地訪問(2名)
- 11・25 広報渉外課、JWU Movie Newsのため撮影
- 11・26 総合研究所研究課題46「日本女子

大学における歴史的建造物の調査・研究—公開研究会に参加

11・30 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）16名見学、説明

12・2 学外の研究者、成瀬文庫閲覧のため来館。西生田成瀬講堂運用委員会出席
席

12・3 学外の研究者、学園史史料閲覧のため来館

12・7 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）4名見学、説明

12・9 入学課から依頼の大学見学の高校生（2校）18名見学、説明

12・11 成瀬記念講堂で文京ミュージズネットミニコンサート開催、入場者約500名。

入試相談会。開館時間延長、入館者約320名（土曜日）

12・15 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）22名および教員見学、説明

12・20 広報渉外課、大学案内のため写真撮影

12・21 入学課から依頼の大学見学の高校生（1校）10名および教員見学、説明

（休館日）
1・5 新版利用案内（二〇〇〇部）納品

1・13 新作絵葉書（山口都氏原画6種、四季の花8種）納品

1・17 広報渉外課、「青鞥展」に合わせて成瀬記念館ロビーで「らいてう賞」のパネル展示を行なう

1・18 展示オープン（目白本館）
1・28 他大学の研究者、上代タノ資料閲覧のため来館

1・29 創立者告別講演記念瞑想会につき平日通り開館（土曜日）。展示オープン（西生田記念室）。附属豊明小学校音楽会（於西生田成瀬講堂）につき西生田記念室昼過ぎまで開室、約110名見学

1・31 第一学習社発行文部科学省検定高等学校用日本史教科書『日本史A 人・くらし・未来』（仮称）掲載用に成瀬仁蔵肖像写真貸出

2・1～3 入試期間中11時より14時の間、受験生付添者見学につき臨時開館、見学者合計57名

2・5 2月中土曜日、平日通り特別開館

2・8 電動書架点検

2・10 電動書架蛍光灯故障につき取り替え

2・12 附属中学校新入生保護者会につき、

西生田記念室特別開室（土曜日）、見学者42名

2・14 消防設備点検（講堂地下倉庫・分館も）

2・19 一般の団体、52名見学、説明
2・24 学生支援推進室ミーティング出席（学園史関係の質問に答える）

3・1 附属豊明小学校3年生約120名、目白本館、分館見学

3・4 創立者命日につき開館（学園休日）、見学者32名

3・5～6 目白本館、館内の赤絨毯張替工事

3・7 防災点検（施設課・総務課・アドバイザー）

3・11 東日本大震災発生。目白本館・西生田記念室は異常なし。分館の壁の一部落下ほか被害あり。当日勤務者2名、帰宅困難のため翌朝まで残留

3・18 大学卒業式中止のため、西生田記念室の展示延期

3・22 目白本館空調機オーバーホール

3・23 荻太郎『子供の日』を豊明幼稚園に移動

二〇一〇年度成瀬記念館運営委員

蟻川芳子館長（学長）、佐藤和人家政学部長、西山力也文学部長、片桐芳雄人間社会学部長、今市涼子理学部長／成瀬記念館担当理事、岩崎洋子家政学部通信教育課程長、高頭麻子教養特別講義1委員長、秋元健治教養特別講義2委員長、島崎恒藏図書館長、島田法子総合研究所所長、岩田正美現代女性キャリア研究所所長、ソーントン不破直子生涯学習センター所長、若林元常務理事、小谷部育子附属幼小担当理事、小山高正附属中高担当理事、後藤祥子桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記念館主事

二〇一〇年度成瀬記念館構成メンバー

館長・蟻川芳子、主事・吉良芳恵、館員・岸本美香子（主任）、杉崎友美（10月1日より）、非常勤・梅原裕香、大門泰子、大谷美枝子、加藤きよみ、佐久間妙美、佐藤恭子、山本文子

博物館実習

二〇一〇年度の博物館実習（第二一回）は、八月三日（火）から九月七日（火）までの六日間の日程で行なった。実習生は、日本文学科一名、史学科一名、科目等履修生二名で、企画展「目白キャンパスの変遷」の準備に参加した。

実習生は、解説パネルを一人一枚ずつ担当し、目白キャンパスの個々の建物について研究した。現存のもの、すでに取り壊されたもの、いずれもその建物が建てられた背景やどのように使用されたかを調べることで、理解が深まり、建物に込められた人々の思いを感じ取る事ができたようである。

業務統計

開館日数 目白 167日、西生田 127日
入館者数 目白 約六、三〇〇人
西生田 約二、一〇〇人

資料提供

西生田 約二、一〇〇人

学園史関係質問受付および資料提供 六四件

出版・映像のための資料提供 二八件

その他

『成瀬記念館 二〇一〇』の発行 二〇〇〇部

『日本女子大学史料集 第五―(三)日本女子大学校規則(明治四三―大正三年)』の発行

目白キャンパス絵葉書の制作

成瀬記念館利用案内(新版)の制作

研修等参加(女性情報アーキビスト入門講座、大学史関係研究会、展示見学)

資料の収集・整理・保存・媒体変換
学園史および資料に関する質問への対応

二〇一〇年度展示一覧

『成瀬記念館(目白)』

4・8・5・5・15

「シリーズ『天職に生きる』

成瀬仁蔵と『服』展

6・15・7・29

および7・31、8・5、8、12、19、26

「軽井沢夏季寮の生活

三泉寮と三井家」展

9・23・12・18

「建築の記憶——目白キャンパスの変遷」

展

1・18・3・4

「『青鞥』創刊一〇〇周年記念展

「『青鞥』と日本女子大学」展

「西生田記念室」

4・8・5・21

「シリーズ『天職に生きる』

成瀬仁蔵と『食』展

6・8・7・29および8・1、7

「軽井沢夏季寮の生活

三泉寮と三井家」展

10・1・12・17

「人間社会学部開設

20周年記念」展

1・29・3・3

「日本女子大学のおひなさま」展



●成瀬記念館(目白)

「シリーズ“天職に生きる”
成瀬仁蔵と『服』展
2010.4.8(木)～5.15(土)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回のテーマは「服」。「家政学」を科学に基づく学問と位置づけ、カリキュラムを構成。その中で衛生面や経済面、機能性や快適性という観点から、衣生活が見直されていった。

「軽井沢夏季寮の生活 三泉寮と三井家」展
(目白)2010.6.1(火)～7.29(木)、
および 7.31・8.5・8・12・19・26
(西生田)6.8(火)～7.29(木)、および 8.1・7



軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。女子大学設立運動時から成瀬を支援し、三泉寮名誉寮監などをつとめた三井家出身の広岡浅子、広岡浅子を紹介して成瀬と出会い、軽井沢に寮舎を建てて提供した三井三郎助・寿天夫人、二人の子息で大椋の木の下に成瀬先生胸像を制作した高修、そして三泉寮の誕生に大きな役割を果たした軽井沢の三井家別荘に焦点をあて、写真や肖像画、書、絵葉書、土地測量図や機関紙、文集などを展示した。

「建築の記憶
——目白キャンパスの変遷」展
2010.9.23(木・祝)～12.18(土)



開校から一〇年の間に様々に変化してきた目白キャンパスの景観の移り変わりをたどる展示を行なった。

取り扱う年代を大きく学園草創期、戦前、戦後、現在に分け、各時代の構内配置図の周囲に建物の写真を配し、キャンパスの移り変わりを概観する一方、個々の建物についてパネルで解説した。また、建築部材や家具など実際に使用されていた実物資料を展示し、手に触れられるようにした。

住居学科・鈴木賢次教授を研究代表者として、住居学科、施設課、成瀬記念館の三者で総合研究所研究課題「日本女子大学の

歴史的建造物の調査・研究」に取り組んでおり、その調査の過程で発見した資料も展示に加えた。

木造建築が中心だった時代には、建物を頻繁に移動していたことが資料からみとれる。一方、建物の名称については、寄附者に由来するもの、学園関係者を記念するもの、周年事業によるものなど、建物の歴史と深く結びついていることがわかる。

なお、本展の一部は博物館実習生が制作した。



『青鞥』創刊 100 周年記念展

『青鞥』と日本女子大学

2011.1.18(火)～3.4(金)



一九一一年(明治四四)に発刊された『青鞥』の創刊一〇〇周年を記念した展示を行った。

『青鞥』は平塚明(らいてう)、中野初保持研、木村錠、物集和を発起人として誕生したが、そのうち四名は日本女子大学の卒業生であった。『青鞥』は、当時一般的であった良妻賢母の思想に反する内容から世間の注目を浴び、賛否両論を交えて「新しい女」論争を引き起こした。

本展では、その話題的となった『青鞥』を生み出した日本女子大学校、『青鞥』に

執筆した卒業生、発起人平塚明と創立者成瀬仁蔵に焦点を当て、『青鞥』を紹介した。展示では当館所蔵の平塚らいてう旧蔵の『青鞥』のほか、らいてう自筆の書簡七通を公開。また本展開催に際して、NPO 法人平塚らいてうの会から『青鞥事務日誌』、日本女子大学日本文学科から「平塚らいてう短冊」をご出展いただいた。さらに奥村氏より「平塚らいてう手稿」を、寄贈いただき、『青鞥』創刊一〇〇周年に際し、貴重な資料を広く紹介することができた。



「シリーズ“天職に生きる”
成瀬仁蔵と『食』展
2010.4.8(木)～5.21(金)



創立者 成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介する新シリーズ。今回は、成瀬の「食」に対する考え方を取り上げた。

成瀬は「天職」を全うするために、健康な心身が不可欠であると述べている。特に「食」は健康を維持するための大きな要素として注目していた。本展では、成瀬の健康観、日本女子大学に取り入れられた「食」と「科学」の教育、成瀬が自身を実験台にした「食」の研究について紹介した。

「人間社会学部開設 20 周年記念展」
2010.10.1(金)～12.17(金)



サクラボのみなさん

人間社会学部開設20周年を祝して現在の人間社会学部の魅力を紹介した展示。はじめに水田米先生から寄附された野毛校地を紹介し、航空写真とともに西生田校地の歴史をたどった。また学部長、各学科長、卒業生からメッセージをいただき、授業や履修内容、就職内定状況などをまとめた。新しい動きとして、地域貢献・キャリアアデザイン学習活動の観点から学校教育ボランティアとサクラボ、西生田生涯学習センターをとりあげた。サクラボの皆さんにはコーナーの展示もお願いした。

「日本女子大学のおひなさま」展
2011.1.29(土)～3.3(木)



日本女子大学の学寮では、寮生自身の手でひなまつりを祝ってきた。毎年恒例となったおひなさま展では、学寮や卒業生宅などで飾られてきた明治・大正・昭和の雛人形を展示している。

三つの段飾りや市松人形、屏風などのほか、家政学部の授業で取り上げたひなまつりのご馳走のノート、ひなまつりの様子を伝える写真や新聞記事などを紹介した。今年も学園関係者のほか地域のみなさんも多く見学に訪れた。

■成瀬記念館より

二〇一一年三月一日に起きた東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）とその後の原発事故は、日本（そして世界）の歴史の大きな転換点になると言われています。それほど、大きな衝撃が日本（そして世界）にはしりましたが、私達はまたその渦中にあり、被災地の苦渋にみちた再生に希望の光をみつけ、逆に勇気をもらう毎日をおくっています。

教育の場である本学園も、こうした転換期にどのように向き合うのか、試されることになるでしょう。その際参考になるのが、これまで歩んできた道のりです。関東大震災やアジア太平洋戦争（そして空襲）に、学園がどのように向き合ったのか、先人達はどのように非常時を乗り越え、新しい日々を切り拓いていったのか、歴史から多くのことを学びたいと思います。

学園の歴史の宝庫である成瀬記念館も、未来にむけ、歴史を紡ぐ作業を続けています。今年度開催されるいくつかの展示も、その一つの軌跡としてご覧下さい。（吉良）

成瀬記念館には成瀬仁蔵関係資料のほか、その他の教員や卒業生に関する資料、学園史関係資料、他大学・他機関の刊行物等が収集・保存されています。成瀬関係では書簡約五〇〇〇通、著作・日記・遺品等約二〇〇点、書籍約二四〇〇冊が記録されています。成瀬以外の文書・記録、写真、上代タノ第六代学長の膨大な資料なども保存されていますが、現在これらは展示によってのみご覧いただいております。二〇一九年の成瀬仁蔵没後一〇〇年に向け、公開準備中です。（岸本）

昨年一〇月に成瀬記念館に着任した新米学芸員です。本学の歴史や日本近現代史の知識、展示に必要な技術など学ぶことが多く、修行の日々を過ごしています。初めて担当した「青鞥」と日本女子大学「展では、主任や記念館のスタッフの方々に会期前日の夜遅くまでお手伝いいただき、間に合わせることができました。

いつもおおらかで明るい主事と、辛抱強く見守ってくださる主任、展示準備を手伝ってくださるスタッフの方々のもと、これから精進していききたいと思います。（杉崎）

成瀬記念館 2011 No. 26

二〇一一年七月十五日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

電話（〇三）五九八一―三三七六

FAX（〇三）五九八一―三三七八

印刷 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三二六―一四



日本女子大学
成瀬記念館

表紙は、上の校章を模して製作された記念館
スタンドグラスをデザインしたものである。